
クラゲって可愛いですね！

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラゲって可愛いですよね！

【Nコード】

N9035P

【作者名】

猫海月

【あらすじ】

「桜の下には死体が眠る…か」

まさか私がその話を実践することになろうとはね。

彼女の亡骸を完全に埋めると、なんとなく月を仰ぐ

「今日は、月が綺麗ね」

その彼女の眩きに応えるものは、何も居なかった。

吸血鬼と少女と幽霊の共同生活な感じ

基本ほのぼの日常たまに殺伐です

タイトルは適当

お昼編 全てはここから始まった！（前書き）

前に短編で投稿してましたがお友達いわく
これって短編じゃなくて連載だよね？

・・・いわれて見れば連載なので連載に変更しました

以下あらすじ

ある少女がおきてから寝るまでのお話

お昼編 全てはここから始まった！

ちゅんちゅん

「んう・・・？」

もぞもぞと手を動かすと何かふにふにした物に当たり体が上手く動かせません。

ふと目を覚ますと目の前には女の人の寝顔、状況を確認するとどうやら抱き枕にされている様です。

このままだと何もせずに今日という日が過ぎてしまうのでじつはたと、しかし起こさないように最善の注意を計らいながら全力でベツトから抜け出します。

「さぶ・・・」

日の出直後の寒さに体がぬくもりを求めますが、何とかこらえようと壁に掛けてある赤色のコートを身にまとい、厚いカーテンの掛かった暗闇の中、大きな音を立てないようゆっくりとドアから部屋の外へと出ます。

「おー、晴れてますね」

しゃりしゃりと窓から落ちたガラス片を鳴らせながら館の外に出ると、ほんのり暖かく、しかし優しくはない陽光がボクを包み込みます。絶好のお洗濯日和と言えるでしょう。

お洗濯の前にまずは朝ごはんの準備をしようと思い、ストックしである薪を組み上げます。そして、首に掛けてあるペンダントを一振りして杖にするとまっすぐ一字に構えて意識を集中……集中……

ポンという軽い音がすると、薪にピンポン玉くらいの大きさの火が付きました。他の人ならもっと簡単に出来そうですが、ボクに取ってはこれでも上々。

火が大きくなるまでの間に水を汲んでくると、お洗濯の時間。ごしごしと丁寧に痛まないように着物や浴衣、ワンピースを洗うと、足場を使いながらがんばって背伸びして洗い終わった服を干します。…もう少し高い足場が欲しいものです。

干し終わると火も大きくなってきたので、館の裏にある氷精式冷蔵庫へと向かいます。氷精式冷蔵庫、利点は氷だけあれば氷精が遊びに来て勝手に冷やしてくれること、欠点は…

冷蔵庫の扉を開けると中に見えるのは、氷、魚、魚、氷、氷、氷…
パタン

扉を一度閉めると深呼吸してもう一度あけます

…現実残酷の用です。

仕方なしにかちんこちに凍っている串に突かれた魚を出すと焚き火の元へと向かいます。

氷精式冷蔵庫の欠点は外に置かないといけないことと、冷却具合が日によってまちまちであることです。外において傷ませるよりはマシですが。

それにしてもたまにはお魚以外が食べたい…人里に買いに行くにはお金が無いですし…餌はダメ、もう全力で狩りするしかないでしょうか。

そんなことを考えながら地面に串を刺して凍った魚を焼いていると山道の方から誰か来たようです。むう…時間が掛かりそう。

「おはようございます、いい天気ですね」

焼けるのにも時間が掛かりそうなので時間つぶしもかねて挨拶を

してみると、登ってきた騎士風の男の人は目を少し見開きながらこちらを見ると気配を尖らせます。そんなにボクが挨拶するのが嫌だったんでしょうか。

すでに杖は短刀へ変更と済み。無駄に手の内を明かすつもりはありません。

「貴様が吸血鬼か？」

ふむう…挨拶への返事は無いですか。ですが聞かれたからには答えあげましょう。焼けるまでまだ時間はありますし。

「ん、まだ吸血鬼にはなっていないみたいですな」

日の光に焼かれたという記憶もやけどの跡もないみたいですし。

「吸血鬼は何処にいる？」

男の人の次の質問、そんなに警戒しなくてもいいと思うんですが…まだ何もする気はないですし…それにしても吸血鬼は何処、ですか、確か前読んだ本だと西洋の方に居たと書いてあったような…

「さあ、西洋の方に行けば居るんじゃないでしょうか」

別に無視してもいいのですが焼けるまではまだ掛かりそうなので答えてあげます。なまなまは嫌ですしね。

「…つまり教える気はないということだな？」

そう言つと男の人は腰に刺してある剣を構えました。
ふむう？ちゃんと教えてあげたと思うんですが、耳が遠いんでし

ようか。それとも都合の悪いことは聞こえない振りなんでしょうか。遠いでもんね、西洋。

それはともかくとして…

「抜きましたね？」

□ □ □ □

動かなくなった男の人をいつものところに置くと軽く祈りを捧げます。なんでも動かなくなったものには祈ってあげると、また次の場所へといけるらしいです。

「あー！」

祈りを捧げてから戻ってみるとお魚が真っ黒になってました…嘆いていてもしょうがないので朝ごはんは焦げ魚にします。

焦げてるのは外だけで中は意外と大丈夫ですね、よかったよかったです。

さて、お金の面は何かあったので人里まで食料の買出しといきましょう。そう決まればかばんを持つと善は急げ、一日は短いのです。

その前に火の始末はちゃんとしておきます、こういう小さなものから山火事は起きるので後始末はちゃんとしなさいといけならしいです。

食料品や本のお買い物済ますとそろそろお昼時、人里に来たときのお昼はいつも決まっています。

「こんにちわー」

山からの入り口に比較的近いところの酒屋さんに入ると声を掛けます。

「お、お嬢ちゃん久しぶりだねえ、今日は買出しかい？」

声を掛けると酒屋さんのおじさんが愛想良く出迎えてくれます。

「はい、食べ物とお昼ごはんを貰いに来ました」

「はっはっは、お嬢ちゃんは素直だねえ！そろそろできるから入りなっ！」

お許しも出たので居住スペースへとお邪魔すると3歳程度になるであろう子供が飛びついて来ました。

「らいむだー！」

「はいはい、らいむさんですよー」

「あらあらー、来夢ちゃん来てたのね、今お昼ご飯できるから食べてらっしゃい」

「はい、頂きます」

しばらくぼーっと座りながらお子さんの相手をしていると美味しそうな匂いが漂ってきて、ご飯になりました。

「そうだお嬢ちゃん、いい酒が入ったんだが、安くしておくよ？」

「ご飯も食べ終わり、お子さんに分身お手玉を披露していると、本題とばかりにおじさんが売り込んできました。

お酒ですか…いつものは買うつもりでしたが…どんなお酒が判らない以上お客さんとして引いておくべきでしょう。

「安くしてくださいね？」

思わず本音が漏れました、ボク、交渉、嫌い。

「はっはっは、相変わらずお嬢ちゃん面白いねえ！安くしてあげるから他のも買ってくれよ」

ボクに買わせるとは…さすがおじさん、商売上手です。

ふと外を見るとそろそろ出ないと帰り際に日が暮れそうです。…
逢魔が時に道に居るのは避けたいですね。

「それじゃボクはこの辺で失礼しますね」

「えー、らいむー、もっとあそぼうよー」

「こら、わがまま言わないの！…またいつでも来てくださいね、歓迎しますから」

別れの挨拶もほどほどにすると、いつものお酒に新しいおまけもかばんに入れると少し早足で人里を後にします。

何とか日が暮れる前にはならずに館に着きました。

暗闇の中、赤色のコートを壁に掛けると、読みかけの本を片手に眠り姫さんの眠るベットへと潜り込みます。ぬくぬくしてます。

ここから先は己との戦い、魔法で作った小さな灯りを頼りに活字を追います。眠り姫さんが起きるか、私の意識が落ちるか、小さな小さな戦い。

「いつか会いたいですね」

日の光の届かない部屋の中で呟きがぼつりと漏れた。

お昼編 全てはここから始まった！（後書き）

それでは、最後までお付き合いいただければ幸いです

夜編 よい子は早くに寝ましよう（前書き）

ある女性がおきてから寝るまでのお話

夜編 よい子は早くに寝ましょう

ホーホー

目を覚ますと目の前に幼さの残った少女の寝顔。どうやら抱き枕にされているらしい。

力を入れすぎないように注意しながら腕をほどくと、寝巻きにしているネグリシエから簡単なドレスへと着替える。

月明かりが入ってくる窓の近くには黒髪の少女が眠っているベツトと机、窓から入る風がカーテンと私の金色の髪、そして壁に掛けられた赤色のコートを優しく揺らしており、まるで幻想のよう。…そうなるも私も彼女も幻想の住人ということになるわね。幻想に住人が居るのかどうかは知らないけれど。

そんなことを考えながら少女が読んでいたであろう本を片付けると、おそらくはしまうのを忘れたと思われる食材の入ったかばんを持って部屋の外へと出る。ん？ワインじゃない、珍しい。

こつこつと月明かりに照らされている廊下を歩きながらかばんの中を見ると、食材とお酒、そして本の中にワインが入っていた。封は空いてないようなので遠慮なく頂くことにしよう。

食材を外にある箱の中へと詰めに行くと隣には先客が居たようで男が倒れていた。とりあえず観察するのは無視して食材を箱の中に詰め込む。どう見ても死んでいるので急に動き出しはしないでしよう。…ところでこの箱、何時見ても氷が溶けていないのだけれど、どういう仕掛けなのかしら？

しかし何度見ても氷は氷、箱は箱である。きっと何かわからないような原理でも詰まっているんでしよう。

少し悩んだが、かばんとワインは箱の隣においておくことにした。それほど長い間開けるつもりもないし。

食材を詰めると気まぐれに男の死体を観察して見る。ふむふむ、

死因は首筋を切られたことによる失血死ね、苦しんだ様子は見られないので即死かそれに近い状況、装備の類は見えないからたぶん売られたか、戦いなど己の体一つあれば他に必要ないという信念の持ち主だったのか…。

そこまで観察した辺りで飽きたので死体を持ち上げる。このままここに放置してもいいのだけれど、腐られると色々困る。すごい困る。ひじょうに困る。

よってこの人は他の魔物の血肉となってもらうことにしましょう。

□ □ □ □

死体を森の奥へと捨て、なぜか干しっぱなしになっていた洗濯物を取り込むと、置いてあったかばんは無くならず、その場で私の帰りを待っていた。ふふ、あなたの主人は別だというのに自身に任せられた仕事に忠実なかばんね。

食堂に寄ってワイングラスを確保し、かばんを持ったままテラスへと出るとワインの栓を開けるとグラスへと注ぐ。赤ワインとはいいセンスだわ。赤い液体がまるで血のようじゃない。

このまま月見酒というのもいいのだけれど、ふと思いつてかばんの中から本を1つ選んで読むことにする。

「何読んでるんですかー」

「…くらげの百戦の歴史？」

「面白いんです…？」

「暇つぶしにはなるでしょ」

いきなりの登場したのだけれど特に驚きもせずに対応する。いつものことだし。正直言ってこの子と話すのは面倒…まあ少なくともこの本よりはマシでしょう。

「おー、ワインですか、珍しいですねー、頂きます」
「あげるとは言っていないわよ？」
「どうせエウナさんのじゃないんだからいいじゃないですかー」
「失礼ね、私が見つけたのだからこれは私のものよ」
「…エウナさんって意外と鬼ですよ」
「何を今さら」

そう答えると銀色の髪に浴衣を着た少女は、そうですねーと苦笑しながらグラスを口に運ぶ。

「ところであなたは何時成仏するのかしら？」
「私が成仏したらエウナさんが寂しがるじゃないですかー」
「そう、それじゃ今すぐにでも成仏できるわね」
「そんな殺生なー」

よよよよーと声が聞こえてくるが、無視して空を眺める。今日は星が綺麗ね。

「そついえば昼間にお客さんが来たみたいですねー」

泣き真似も飽きたのか同じように空を見ながら話を振ってくる。
お客ね…あの男のことかしら、たぶん。

「知ってるわよ、ついさっきまで一緒だったし」
「会ったんですか、どうでしたー？」
「不味そうだったわ」

あの人に関わらず死体を食べる気はしないけれど。でも今の言い方だと…一応聞いてみましょうか

「殺したのは、あなた？」

「嫌ですねー、私が殺したら切り傷じゃ済まないですよー、私もお昼は寝てますし」

屋敷の中にも入りませんでしたし、そういうと彼女はワインを一口飲んだ。というより幽霊なのに寝るのか

「聞くつてことはエウナさんがやったんじゃないんですか？」

「バカいわないで、吸血鬼が日の出てる場所で戦うわけないじゃない…ちよつと！？あなた飲みすぎよ！少し自重しなさい」

「ふつ、私に目をつけられたのがワインの最後でしたね！…エウナさんがやったんじゃないのならしたのは…」

「ええ、あなたの考えてる通りだと思うわ」

私もこの子もあんなとこまで動かさずに屋敷内で殺してで夜まで放置するわ。だからわざわざ動かすとしたら、それは一人しか居ない。

「あの子人間ですよ？私たちのこと知ってるんでしょうか？」

「さあ…どうなのかしらね…」

あの子は知ってるのだろうか？自身が捕食される側で私が捕食する側であるということ。

「ねえ、あなたはあの子に出会ったらどうするの？」

ふと気になったので問いかけてみる。

「んー…あの子には服を貰ってますしねー、向こうの敵意次第で決めると思いますよ」

彼女は自身の着ている浴衣を見下ろしながらそういった。

「そう…」

その返事を聞くと私はワインを口に含むと月を見上げた。

浴衣姿の彼女もそれ以上は何も言わずに静かに月を見ながらワインを飲んでいる。

「あれ？もう戻るんですか？」

「ええ、残ったのはあげるわ」

あれほどあったボトルも気づけば残りわずか。少し早い今日は戻ることになりました。

「ねえ、エウナさん…」

「何？」

「エウナさんは…あの子に会ったらどうするんですか？」

「そうね…そのときに考えるわ」

そういうと私はテラスを後にした。それ以上の追求が来ないうちに。

□ □ □ □

部屋に戻るとベットでは変わらずに少女が眠っていた。

寝るにはまだ早いので彼女の近くに腰をおろすと、その黒髪を優しく撫でると問いかけてみる。

「あなたは私が吸血鬼だって知っているのかしら？」

「んう…」

「実際のところあなたは食べられる側なのよ？」

「うう…」

帰ってくるのは寝息のみで返事はない、まあ当然よね。それにしてもホントに無防備ねこの子。

さらさらとした手触りのいい髪を撫でながら窓から月明かりに照らされた庭を見ると、浴衣の少女が去り際に聞いた言葉がよみがえる。

会ったらどうするか…ね。

私は捕食する側であり、この子は捕食される側である。もし起きている時に会ったらただでは済まないだろう。

そう、だから…

「あなたが目覚めることなく、この関係が何時までも続くといいわね」

眩きは誰にも届かずに、ただ月明かりだけが部屋を照らしていた。

夜編 よい子は早くに寝ましよう（後書き）

昼編の夜のお話

それでは、楽しんでいただけたら幸いです

出会い編 あなたは明るいのが好み？（前書き）

やっと出会いです

ということで以下登場人物表♪ゞ（＜ω＞）ノシ

エウナ

吸血鬼 家主

来夢^{ライム}

一応人 ちびっ子 魔法使い 家事とか色々

メリーさん

ゆーれい 料理とか屋敷のこと色々 私メリーさん、今あなたの後
ろに… 命名来夢

出会い編 あなたは明るいのが好み？

く来夢ちゃんく

早く起きて！ここから逃げるわよ！

「んう…？」

誰かに呼ばれた気がして目を覚ますと、窓から入ってくる月明かりが優しく辺りを照らしています。何か…夢を見ていた気がするんですが。どんな夢だったのでしょうか。

今日は無風なのか開け放されたカーテンは沈黙しており、部屋の中で動くのは僕だけのようです。

ぼーとした頭であたりを見渡すと隣には自分しか居ないベット、どうやら夜の間は活動するみたいです。ずっと寝っぱなしだったらどうしようかと思いましたが、それは杞憂に終わったようです。よかったよかった。

ベットから降りて赤いコートを羽織ると、一度窓の外の景色を見えます。この部屋だと屋敷の庭と夜に寝静まる街が見渡せるんですね。

ペンダントを杖に変えてからドアの外へと出ます。むう…思ったよりも暗いですね。

一瞬明かりをつけようか悩みましたが…無闇に自分の位置を知らせる必要もないでしょう。お屋敷の中に居るのが1人とは限りませんし。

お昼とは違い自身の役割を果たしている窓へと近づくと、杖の持っていないほうの手で叩いてみます。弾力がありますね、強引に外に出るのには骨が折れそうです。

こつこつと廊下を歩いていると、その様子がお昼とは違うことに気づきます。長くなってます…？となると…

そこまで考えたところで思いつきり全身を屈めると、杖に込めておいた魔力を発動させます。屈んだ頭の後ろでは誰かの息を呑む音と何かが通り過ぎていく風の感覚、そしてボクの持っている杖から発する爆音と閃光。

目くらましの閃光が振り注ぐ中、左手で札を取り出し肉体強化の術を発動させると全力で前へと走り出します。呪文は要りません、唱える余裕もないでしょうし、そこまで長い時間の発動は必要ないでしょう。

さつきまで居た場所ではしばらく呆然としている気配がしましたが、すぐに我に返るとすごい速さで追いかけてきました。

むう、目くらまし込めるの大変だったのに…札の発動までの時間が取れましたし良しとしますか。

そんなことを考えながら走り、ところどころで杖を振って屋敷に仕掛けた罠を次々発動させます。

撃退は考えてません。少しでも時間稼ぎになれば上々でしょう、このままの速度でもいずれば追いつかれそうです。

それにしても侵入者用に仕掛けた罠が逃げる時に役に立つとは、備えあれば患い無しですね。後ろからは発動させるたびに罠が破壊される音がしてきます。…あんまし役に立ってないですね。少し傷付きます。

終わらない夜が無いように仕掛けて置いた罠も無尽蔵じゃありません。すぐに何も仕掛けてない場所まで来てしまいました。ホントに長くなってるようですね、廊下。このままじゃすぐに追いつかれるでしょう、困ったものです。ところで彼女は今どの辺に居るんでしょう？まだ捕まるわけには行かないんですが…

全ては、一瞬の邂逅のために。

「エウナさん」

「エウナさん！あの子が起きたみたいです！」

「っ外に出さないで！」

浴衣の少女に指示を出してから、あの子の寝ている部屋まで急いで行くと、あの子は窓のほうを触りながら何かを考えていた。どうやら来る 때가来たようね。

このままあの子が寝るまで逃げるか…ダメね、私の帰る場所はここにしかない、外へと逃げて明日の出でアウト。それなら…

こつこつと無防備に歩いてる背中にこっそり近づいて右手を振り上げる。殺さないように、けれども気絶しないということもないように。

「っ！？」

無防備に歩いているあの子の頭を狙って右手を振ると、彼女は突然屈むことで回避した。避けると同時に彼女の持っている杖から発せられる爆音と閃光。避けられた！？気づかれていた様子は無かったのに！？

白く染まる視界から我に返ると、あの子は人とは思えない速さで遠ざかっていた。…逃がさない。

速いとはいっても所詮は人、吸血鬼である私の方が速度では勝っている。だが、あの子が仕掛けたのであろう罠を1つずつ丁寧に潰している中で中々追いつくことが出来ない。

あの子は気づいているのかしらね…仕掛けた罠は侵入者用、つまり私が避けると逃げている自身へと向かう可能性があるというのを…たぶん気づいてないんでしょうね。何を仕掛けたのかすらも把握してなさそうだし。ちよっと！ずいぶん多いわね！どんな化け物

が進入するのを想定して仕掛けたのよ！？

飛んで来る丸太やら矢やら槍やら鉄球やら石の壁やら金ドライやらを粉碎しながら追いかけると突然罠が飛んでこなくなった。途中からどう考えても廊下からは飛んでこないようなものとか罠なのか疑問に思ふものも飛んできたけれど、どうも品切れみたいね。

この機会を逃さないように、けれども気づかれないように近づくと、体を狙って左手を振り下ろす、手加減無しで殺す気の、人には避けられないはずの一撃。けれどもあの子なら避けるでしょう。でも、それがこちらの狙い。

何か硬い壁を砕いたような感覚と共に床までぶち抜く左手。あの子は…狙い通りに、右へと避けたみたいね。

飛び退くように避けたあの子の体を追うように右手の裏拳を放つ。可哀相だけれど骨の1本や2本は覚悟して気絶してもらいましょう。それでも死ぬよりはマシでしょう？

全ては、永久に続く関係のために。

「来夢ちゃん」

急に危険を感じて結界を張りながら右へと飛びのくと、横の床に穴が開きました。たぶん腕でも振り下ろしたんでしょう。それよりも不味いのは今の姿勢、無理な体勢で避けたせいで追撃が避けられずにありません。追撃がないということは…なさそうですね、今は目くらましも何もないので。さらにタイミングの悪いことに肉体強化の術もそろそろ解けたそうです。しょうがないですね…

”我が名の下に命ずる”

避けたボクを追う用に飛んできた裏拳の前の前へと左手を出しながら、心の中で呪文を唱えます。口に出すほどの効果は無いですが唱えないよりはマシです。

「え…？」

ゴキッ

どうやら被害は左の1本で済んだみたいです、あばくくらいは覚悟してたのですが結果は上々。どうやら魔法の発動も間に合ったみたいなので、また走り出しました。

左手が骨の碎けたみたいな音と共に動かなくなりましたが…魔法の副作用で熱がすごい勢いで失われていく関係で確認よくわかりません。

無事外へと出れたら確認することにしましょう。もう無事といえるのかは怪しいですが気にしないことにしましょう。まだ追いかけてきているみたいです。それにしても2度も裏切ってしまった…嫌われましたかね？

しばらく走っているとホールへと着いたみたいです。後は玄関の扉を開けて外へと出るだけ。

ですが扉はびしりと閉まっており、内からも外からも通す気は無いという覚悟を見せてきます。いいでしょう、そちらがそのような覚悟ならボクも相応の覚悟を決めます。

そのままの速度を生かす様に前へと回転しながら飛んで回し蹴りでその覚悟ごと扉を蹴破ります。もしも蹴破れなかったら骨が折れるじゃすまなさそうですね、そのときはボクの覚悟がこの屋敷の覚悟を上回れなかったのでしょうか。生憎と手は使えないので足で代用するしかないのです。

回る視界の中で彼女と視線が合ったような気がします、暗くてよくわかりません。やっぱり外の月明かりじゃないと見るのは無理のようですね。

くエウナさんく

避けた彼女を裏拳で追撃する、ここまではよかった。後は気絶した彼女の治療をして部屋に戻すだけ…なのに！

「え…？」

ゴキッ

思わず声が漏れる。私の右手はあの子の骨を叩き折った事と引き換えに、その威力を失ったみたいである。えっ…？一瞬の、けれども致命的な、自我の忘失。

その間にあの子は体勢を立て直すと獣の様に走りだした。

その気配で自我を取り戻すと、焦りが原因かさつきよりも冷たく感じる空気の中、急いで彼女を追いかける。…速い！

信じられないことに彼女はさつきよりも速い速度で走っていた。

吸血鬼である私も追いつけないほどに。…どうやらこの追いかけっことは私の負けで終わるみたいね。

長くなっていった廊下も、もう終点のようね。どれだけ伸ばしたとしてもいずれ限界は来る。永遠に続くと思っていた私とあの子の関係のように。

ホールへと駆け込んだあの子はそのままの勢いを殺さずに綺麗に回転しながら跳んだ。どうやら扉を蹴り開けるつもりみたいね。

それがわかったとしても今の私にはあの子を止めることは出来ない、ただ悪あがきとして追いかけるだけ。

振り向いたあの子と視線が合ったような気がするのだけれど、確かに確かめることは出来なかった。外に出たらあの子は逃げるのでしょうね、2度も攻撃を加えたのだからそれは当然の判断でしょう。私とあの子は捕食する側とされる側の関係、出会ってしまった以上無事では済まない。そして…捕食される側が捕食する側の傍に居る事も…また無い。逃げたあの子をもう私は見つけることは出来ないでしょう。

ああこんな結末なら、素直に会って話をするべきだったかしらね。

危害を加えてない状態なら私の望んだ結末もあつたでしょう。

でも、それも後の祭りね。後悔先に立たず、とは何処の言葉だったか…。もう私に出来ることは、何もない…。

ズサー

綺麗な回しけりを放ったあの子がこれまた綺麗にずっこけると何度か転がって行った。無理も無い、蹴りが当たる直前に扉が開いたのだから。

そして転んだあの子へと追いつくのは造作も無いこと。

「ごめんなさいー、外に出しちゃいました」でも、これであの子も逃げられないでしょう？」

扉から出る瞬間そんな声が聞こえた気がした。まったく、気が利くのか利かないのか、よくわからない幽霊ね。なんにしてもこれでは出来るのだから感謝するべきなのかしら？

「あ、後エウナさんがぶち抜いた床、ちゃんと直してくださいね」

思い出した様に後ろから来た言葉の方は聞こえなかったことにしましょう。

転んだまま動かないあの子が逃げないように距離に気をつけながら、様子を見る。改めて月明かりから見ると酷い格好ね。

赤いコートは所々霜が降りているし、青みのかかった白のワンピースは転んだおかげで泥で汚れているし、左手からはとめどなく血が溢れている。あら、コートに汚れがないわね…いつの間にか杖も持っていないみたい。

そして私の黒を基調としたドレスもあの子の仕掛けた罫やら自身で床をぶち抜いたときにが飛び散った木屑やらでところどころ穴が

空いている。

しばらく観察をしていると、あの子はゆっくりとした動作で体を起こし、きよろきよろと周りを見渡すと、私の方を見た。目が合ったわね、どうするべきか…

「こんばんは、ご機嫌いかが？」

とりあえず挨拶してみる、声は冷静なはず。でも腕があんなだから機嫌も何も無いでしょう…他に言うことはないのか私は…。しかも不本意とはいえやったのは私だし…

「ほえ…わわっ」

軽く自己嫌悪に浸っているとやっと状況を把握したのか、あの子は飛び上がるように立ちあがった。に、逃げるのかしら…？

「えっと、こんばんわ？」

どうやらそのまま逃げるということはせずに会話はしてくれるらしい、でもまた何時逃げられるかわからないのであまり刺激しないでおきましょう。さて、何を話すべきかしら。

あの子はというと自身の折れてるほうの手を見ると、軽く驚きの様子を表していた。ところで痛くないのかしら？

「初めましてで…いいんでしょうか？」

何を喋るべきか悩んでいるとあの子のほうから話しかけてきた。

「初めましてでいいんじゃない？」

寝てる以外で会うのは初めてなのでこれでいいはずよね。それにしても綺麗な黒目してるのね、この子。

あの子はうん、よし、やるんです、がんばりますとかぶつぶつ呟いていると思ったら。綺麗にお辞儀をしながら

「えーと…初めまして来夢でしゅ」

噛んだ、それも見事に噛んだ。

「…初めまして、ライムです。来る夢と書いて来夢です」

噛んだのは無かったことにするらしい。

「これはこれは初めまして、エウナよ」

特に話すことも思いつかないので私の名前も言っておく。来る夢で来夢ね…つけたのは東方の人かしら？

ああ、そういえば聞いておくことがあったわね。

「あなた、私が吸血鬼だってこと知ってるのかしら？」

「ほえ？んー…聞く感じだとそうらしいですね」

そう聞いてみるとあの子…来夢は嬉しそうに答えた。そう、知ってるのね。なら

「逃げないのかしら？」

「何ですか？」

何で？それは私が捕食する側で来夢は捕食される側だから逃げるのが当然の反応じゃないのかしら？そうは思っただけでも言葉は出な

かった。それを言ってしまうとこの子が本当に逃げてしまう気がする。

「やっと会えたんですもの、逃げるわけ無いじゃないですか」

そう言って、来夢は笑った。やっと会えた…？

「え…？だって、あなた逃げてたじゃない」

「だってあんな暗いところだと顔が見えないじゃないですか、気絶させられても会えませんか…？やっぱり初めて会うんですから明かりは十分じゃないとダメですね！」

「で、でも私はあなたに危害を加えたのよ！？」

「この手のことですか？でも手加減してくれたんですからこの程度で済んでるんですよ？」

「…私のこと、怖いとは思わないの？」

「怖いも何も…ボクのことを殺そうと思ったならいくらでも機会がありますよね？」

今でも殺そうと思えば出来ますよねー。そういつて来夢はどこか寂しげに笑った。ということは…

「本当に…逃げないのね」

近づいて頬を触ってみると少しビクツとしただけで逃げることはなかった。全ては私が空回りしてたってことね…

体の力が抜けて疲れた感覚がする。吸血鬼でも疲れる、ほとんど精神的なものだけね。

そのまま屋敷の方へと体を向けると歩き出す。ん？付いて来ないわね。

「ほら、そんなとくに居ないで入りなさい」

「ほえ？ここに居てもいいんですか？」

「何言ってるのよ、入らないと手の治療が出来ないでしょう」

そこまで言ってもまだ動かない彼女の手を引くと屋敷へと歩き出す。自分でつけた傷なのだから、治療くらいは私がするわ。

来夢はしばらく手の引かれるままぼーぜんと歩いていたが、やがて照れたように笑うと私の隣に並んで歩きだした。

「えへへー…もうお別れなのかと思いましたよ」

ええ、私もよ。けれども言う言葉はそれではない。

「何言ってるのよ、これから始まるんでしょう」

□ □ □ □

連れ添って歩く2人を屋根の上から浴衣姿の少女が見ていた。

永久に続く関係なんて存在はしない。けれども、その終わりが次の始まりでないとは、誰にもいえない。

「願わくば彼女たちに幸せが訪れることを…なんてね」

この屋敷の元主であつた少女はそう呟くと透けるように消えた。名前の無い自分のことを呼ぶ、屋敷の主の声に答えるために。

出会い編 あなたは明るいのが好み？（後書き）

少しでも楽しんでいただけたら幸いです

もしかしたらそうなったかもしれないお話（前書き）

バトル回だよ！

出会い編から少し経った時期

もしかしたらそうだったかもしれないお話

ピー…ピー…

「鴉の鳴く夜に気をつける、ですか…」

静かな満月の夜にトラツグミの声が鳴り響く。

「こんな夜は何か起きそうですね…何も無いといいのですが…」

ある屋敷の屋根の上で、銀色の髪をサイドに括った白いワンピース姿の少女が森の方を見ながらそう呟いた。

「…そういうわけにもいきませんか」

屋根から見下ろすと、黒い髪に赤いコートの小柄な少女が屋敷の庭をゆつくりと歩いていた。右手に月光を反射して銀色に輝く短刀を握り締めて…

ギイイイイイ

少女が屋敷の扉をゆつくりと開けると、歓迎しないかの様に軋んだ音を鳴り響かせながら扉が開いた。

ホールにあたるであろう部分は明かりはなく、唯一の明かりとなるのは月の淡い銀色のみ。

何処も警戒してなさそうな、けれどもゆつくりとした足取りで少女がホールの真ん中へと歩いていると、上から何かが腕を振り下ろしながら落ちてきた。そして、その攻撃が来ることを知っていたかのごとく前へと跳ねて回避する赤いコートの少女。

「我が家に何か用？」

突然落ちてきた女性は、床から手を引き抜くと赤いコートの少女にそう問う。女性は流れるような金色の髪に赤い瞳、そして黒を貴重としたドレスを着ている。

「なんて事はありません。お散歩していたら吸血鬼の住むと言われているお屋敷を見つけたので、挨拶でもと」

「へえ…挨拶も知らない田舎物が迷い込んだのかと思ったのだけけれど、違うようなのね。それで、家に何か用？」

黒いドレスの女性は瞳に殺気を込めて、もう一度問う。

「なんてことはないですよ、今の世の中、あなたみたいな存在は生き辛いと思ひまして」

「あら？手助けしてくれるの？ありがたいわね」

「はい、地獄までのカタミチップとなりますが…お安くしますよ？」

赤いコートの少女はそう言うにつこりと笑った。それはとても綺麗な、けれどもこの場ではあまりにも不似合いな壊れた笑顔。

「そう…たかが人間ごときが私に勝てるっても？」

「甘く見ないでください。たかが人間だと甘く見ると死にますよ？」

「今の世の中、生き辛いのはあなたのほうではなくて？赤いコートの狩人さん？」

「それはお互い様でしょう？日の光が苦手な血吸い鬼さん？」

そこまで言い合つと、お互いに構える。

「「こんな世の中で生きるのは辛いでしょう、だから私が冥界^{ボク}に送つてあげるわ（ます）！！」」

その言葉を皮切りに黒い女性が爆ぜる様に前へと飛び出し、赤い少女との距離を一瞬で詰めると、相手を殺すべく拳を振るう。

すると、赤い少女はその動きに応じる様に避けると、お返しとばかりにその手に持った短刀を振るう。

月明かりの下、赤と黒がまるで踊っているかの如く舞い続ける。

だが、それも最初の間だけであり、だんだんと赤い少女は短刀を振るうことなく、避けるだけになっていった。

「避けるだけ？」

黒い女性は、赤い少女が避けながら張っていく結界を次々に壊しながら己の腕を振るうと、赤い少女にそう問う。

「本当にそう思いますか？」

赤い少女はそう答えると、横なぎに振るわれた腕を屈むようにして避け、そのまま跳ねる様に黒い女性の首を狙う。

「残念ね」

黒い女性はそう笑いながら、赤い少女の体を殴り飛ばす。赤い少女はまるでゴムまりの様に吹っ飛ぶと、ホールの壁に当たると動かなくなった。切られた黒い女性の首からはしゅわしゅわと煙が立ち、やがて何処も切られて無いかのように元の白い肌へと戻った。

しかしそのまま追撃はせずに、黒い女性はまるで不思議なものを
見るかの如く殴り飛ばした手を見つめると、赤い少女のいる壁の方
へ視線を戻しながら静かに構えた。黒い女性の見つめる先、赤い少
女は少し咳をしながらもゆっくりと立ち上がると、弾けるかの如く
走り出した。

黒い女性は赤い少女の短刀に何かを感じたのか、素手で受けるこ
とはせずに避けることに専念しておる。一方、赤い少女は全身をば
ねの様に使いながら、黒の女性に幾つかの打撃や短刀を振るう。月
明かりの下、再び始まる赤と黒のダンス。

「避けるだけですか？」

さきほどとは打って変わって、赤い少女が短刀や打撃を繰り出し
ながらそう問う。

「本当にそう思う？」

黒い女性はそう答えると、赤い少女の繰り出した回し蹴りを片手
で受け止め、赤い少女の体を狙って拳を振るう。

そうすると赤い少女はソレを狙っていたかの様に、自身に迫る拳
を何度も結界と己の左手を犠牲にしながら強引に避ける。そのまま
赤い少女は床に片手を付けて黒い女性の手を振り解くと、まず足を
切り飛ばし、心臓へ短刀を突き刺した。月明かりの中を、砕かれた
左手から出た鮮血と黒髪が数本舞う。

「っ！？」

「我が名の下に命ずる…」

黒い女性は一瞬の判断で赤い少女を殴り飛ばすと、赤い少女が
飛ぶのとほぼ同時に黒い女性の左半身が吹き飛び、黒い女性は床へ

と倒れた。

「コレは…さすがに不味いわね…」

黒い女性は吹っ飛んだ赤い少女の方を睨みながらそう呟く。何かの術を使われたのであろう、黒い女性の体は先ほど見せたような再生力は見せず、驚くほどゆっくりとした速度で再生していた。

「吸血鬼って言うのは心臓を潰されても生きてるんですか。話には聞いてましたが本当に化け物なんですね」

赤い少女はそう言いながら、ゆっくりと、しかし確実に立ち上がると黒い女性に止めを刺すべく歩き始めた。その姿には、もう使い物にならないであろう自身の左手を気にしている様子はまるで見られない。

「化け物はあなたのほうでしょう？赤い狩人さん♪」

「!？」

何処からかこの状況を楽しんでいるかのような少女の声がしたかと思うと、ほんの数秒前までは誰も居なかった赤い少女の後ろに白いワンピース姿の少女が現れた。

赤い少女は白い少女の突然の出現に対して跳ぶようにして横へと跳ねると、警戒する視線を白い少女へと向けた。

「ありやりや、エウナさんったらこんなにされちゃったんですかー。ホント、噂に違わぬ化け物なんですネ赤い狩人さん」

「…また五月蠅いのが来たわね」

「もう、せっかく助けに来た相手にそういうこと言いますか？帰っちゃいますよ？いいんですか？」

白い少女はまるで赤い少女などはじめから居ないかのごとく、黒い女性の下へと歩み寄ると楽しそうに観察をしている。そして、それも終わったのであろう、白い少女のことを警戒している赤い少女の方へと視線を向けると

「まあ、でも…いけないことをした人にはお仕置が必要ですよね！」

白い少女がそう言うのと、白い少女の足元から大量の触手が飛び出し、赤い少女へと迫る。

「逃げてても無駄ですが、簡単には捕まらないでくださいね？それは…あまりにもつまらないですから…」

赤い少女は人とは思えない速度で床や壁の上を駆け回ながらも、時に短刀で迫る触手を切り裂き、時に結界を張り触手を防ぎながら、触手から逃げ続けている。一方、触手の方はというと、まるで赤い少女をいたぶるかのように、けれども決して外へは出させないようにながら、赤い少女を追い回していた。そして、その様子を白い少女が楽しそうに笑いながら眺めていた。

「はい、ざんねーん」

赤い少女は降り注ぐようにして落ちてくる触手の波を切り抜け、外への扉へとたどり着くが、あと一歩というところで触手に捕まり床に叩きつけられた。

「すごいですねー、あの波を避けきって扉までたどり着くなんてー。まあ、どうせ開くことはありませんけど」

白い少女が感心したように拍手をしながら触手に四肢を縛られた赤い少女へと近づく。

「何するつもり…?」

未だに体が再生しきっておらず、床に伏せたままの黒い女性がそう問う。

「このまま触手で引き裂くのもそれはそれで素敵なんですけど…触手に殺されたんじゃないじゃあまりにも可哀想でしょう?ですから私の手で殺してあげようと思ひまして」

そう笑いながら答えると、白い少女は何処から槍を取り出すと、赤い少女の前で振りかぶり

「さようなら、赤い狩人さん」

赤い少女の胸を貫いた。

「やっと…捕まえましたよ」

赤い少女がそう呟くと、貫いている槍がだんだんと凍り付いていく。

「っ！早く離れなさい！」

「言われなくてもやってます！でも！もう腕まで凍って！」

黒い女性の叫びに白い少女は焦ったようにそう叫び返すと、まだ凍っていないもう片方の手でナイフを取り出し、まだ完全に凍って

いない自身の腕へと振り下ろす。

月明かりが照らすホールを鮮血が舞う。

「ボクが逃がすと思いますか？」

見るといつの間にか触手の拘束から逃れていた赤い少女が、振り下ろされているナイフの軌道上に左手を出し、白い少女が腕を切り離すことで凍結から逃れることを防いでいた。ナイフを止めた左手のコート袖からは血がとめどなく溢れ、白い少女の足元を真っ赤に染めている。

そのまま赤い少女は自身に絡み付いている触手を砕くと、完全に凍りついたまま動かない白い少女へと短刀を振るった。

「嘘…でしょう？」

呆然としている黒い女性の目の前で、白い少女はきらきらとした欠片となって砕けた。数秒前まで白い少女であった欠片は床に落ちると、輝く粒子となり後には何も残らなかった。

その様子を見ることもせず、赤い少女は自身を貫いている槍を引き抜くと投げ捨てた。

カランカランカラン

静かなホールに投げ捨てられた槍が床に落ちる音が寂しく鳴り響く。その音は白い少女がもうこの世に存在していないことを証明するかの様であった。

その音がホール内に響き終わるとほぼ同時、体の再生が終わり立ち上がった黒い女性が赤い少女へと近づき、拳を振るう。

その拳が赤い少女に届く瞬間、黒い女性の前に居たはずの赤い少

女は後ろへと突然現れ、無防備なその胸を短刀で貫いていた。

黒い女性からその様子は目の前に居た赤い少女が突然消えたかと思っただけ、自身に短刀が生えてきたかのように見えたのであろう。

その事実には驚きと焦りの表情を見せながらも、前へと倒れるようにしながら短刀を抜き、後ろに居る赤い少女へと振り向きざまに回し蹴りを放つ。

しかしこれもまたさっきと同じ様に、当たる直前に赤い少女の場所が変わり、空振り終わる。そして、回し蹴りの体勢で回避が出来ない黒い女性の胸へと、正面から抱きつくかの様に赤い少女が短刀を突き刺す。

「あなたも、コレでおしまいですね」

赤い少女がそう告げると、突き刺さった短刀からだんだんと黒い女性の体が凍っていく。

「このっ！死ね！死になさいよ！」

黒い女性はその様子を見ることもせず腕を振りかぶると、目の前に居る赤い少女へと叩き込む。何度も、何度も、何度も、何度も赤い少女は殴られるたびに体を少し宙へと浮かすが、ほぼ密着状態なので威力があまりないのであろう、突き刺している短刀を離すことはなかった。そして、ついには黒い女性の体はほとんどが凍り付き、もう無事なのは頭だけとなった。

しかし、突如の体の凍りが溶け、黒い女性は胸に短刀を突き刺したまま倒れこんだ。

倒れこんでいる黒い女性の横では、赤い少女がまるで眠るようにして息絶えている。

「助かった…のね」

そう呟くと黒い女性は短刀を引き抜き、屋敷の庭の中央にまで行く、月を見上げた。

静かな屋敷の庭ではトラツグミの鳴き声が遠く寂しく響いている。

ピー…ピー…

以下おまけ

「っ！？」

突然眠っていたベットから飛び起きる。今は…何！？夢…？でも…この感覚は…自身の半身が吹き飛ばされる痛み、長い間の親友が碎けて粒子となった光景、赤い少女を殴った感触。どれも鮮明に思い出せる。

ふと、大切な少女が無事か気になり隣を見ると、来夢はすやすやと寝息を立てて眠っている、…ふう、この分ならしばらくは起きないわね。

「うにゅ…すう…」

常に微かに血の香りを漂わしている赤い少女の頭を一撫でしてから立ち上がり、寝巻きとしているネグリジェから黒を基調としたいつものドレスへと着替えると、そのまま屋敷の庭へと出る。たしか

…今の夢ではこの辺だったような…

「その様子だといいい夢は見れなかったみたいですねー」

徐々に薄れていく記憶を頼りに最後に見た場所を探していると、突然後ろから声を掛けられる。それは聞きなれた、いつも通りの彼女の声。

「今のは…あなたの仕業なの？メリー」

砕けた光景が頭の中に浮かぶ中、ゆつくりと自身を落ち着かせながら聞いてみる。

「まさか、どんな夢を見たのか知らないですが、私が起こしたわけではありませんよー」

私にできるわけ無いじゃないですかー。そう言いながらも彼女は全てわかっているのだろうか、私の緊張をほぐすように柔らかに微笑むと

「エウナさんの見た夢は…もう一つの世界なんだと思いますよ」

「もう一つの世界？」

「はい、パラレルワールド、あり得たかも知れない可能性の世界、エウナさんはそんな可能性の1つを夢としてみたんでしょう」

ちなみに私のは結婚する話でした。どこか遠い目をしながらメリーはそう呟く。

「先に言っておくけれど…忘れないわよ？」

「まあまあ、置いときましょう」

殴られた理由を思い出し憤る私をなだめるように手を振ると、メリーは続けた。…置いていてあげようじゃない。少なくとも、今はね。

「私の憶測となりますがおそらく犯人はあの子でしょうねー」

「あの子にそんな能力があるとでも？」

「絶対とは言い切れないですが…エウナさんもあの子と眠っているときに見たんでしょう？それはただの偶然かもしれませんが、けれども」

「そうじゃないかもしれない、と」

そうですねー。そう言うとメリーは真面目な表情で私の顔を覗き込むと

「あの子は不思議な子です。見た感じではただの人ですが…人として、いいえ生物として致命的な何かが壊れてる…そんな印象、エウナさんも感じたことあるでしょう？」

そこまで言い、メリーは私の顔から目を離すと満月を見上げた。

どこかが壊れている…か。初めて出会った時のことを思い出しながらもメリーと並んで月を見上げる。夜空というキャンパスの中、満月は何処も壊れている事も見せずに綺麗な丸を描いている。そういえばここから見ると綺麗だけれど実際はでこぼこしていると聞いたことあるわね。

そのままどちら何も言わず、幽霊と吸血鬼はぼんやりと月を見上げていた。

「ところでエウナさん。いいお酒が手に入ったんですが、一緒に飲みませんかー？」

「いいわね、月見酒といきましょう」

…せっかくいい風に終わらせようとしたのに酒を飲むんですね。

「「そんなの私たちには関係ないでしょう？」」

さいですか。

私は月を見上げながらグラスを傾けると、隣の親友に向かって語りかける。

「あなたの話、事実かも知れないわね」

「あれ？エウナさんがこういうことを認めるなんて珍しいですね」

「ええ、珍しいのよ、でもね」

「「私たちにとってあの子が大切であることには変わらないわね（ですか？）」「」

…思わず無言でメリーのほうを見る。彼女は楽しそうに横目でこちらを見ると、手のグラスを呷り空にすると、次の酒を注いだ。つて！

「ちょっと！あんた飲みすぎよ！」

「エウナさんも飲めばいいじゃないですかー」

「私は味わって飲むのが好きなの！あなたみたいにバカバカ呑まないわよ」

「私だって味わってますよーだ」

楽しそうに酒瓶を奪い合う二人を、満月が優しく見つめていた。

もしかしたらそうなったかもしれないお話（後書き）

バトル回、楽しんでいただけたのなら幸いです

俺たちの戦いはこれからだ！（前書き）

甘い話を書けといわれたので・・・第2弾
第1弾は後に投稿されるはず！

俺たちの戦いはこれからだ！

ある月明かりに照らされた屋敷の中、割烹着の上にエプロンという、チヨコレートケーキチヨコソーす掛けみたいな少女が歩いていた。

身長は155程度、銀色の髪をサイドに括っており、瞳は透けるような緋色、どこか浮世ばなれした雰囲気の少女である。というより体が軽く透けている。見えてる！窓から見えてるから！早くその事実に関心して！

「今日のご飯は何にしましょうかー」

コツコツと廊下で何を作ろうか考えながら一人呟く。たまに肉料理もいいですねー、確か材料はあったような…うん、悩んでいても仕方ないので聞いてみることにしましょう。

「そーだんしよう、そーしよう」　そう結論を出すと、屋敷の住人がいつも居るであろうテラスへと向かう。いつものように消えて出てもいいのだけれど、こんな満月の夜は歩きたい気分。

テラスに入る直前の扉の前で、息を殺しながら外の様子を伺う。誰も逢瀬の瞬間になど出会いたくはないのである。今までで出会ったことはありませんが

ひよつこども！突入にはタイミングが命だ！気を抜くな！
イエスサー！

脳内で誰かの激励が飛ぶなか、うすーくドアを開けて外の様子を伺う。誰でも逢瀬の瞬間に興味はあるのである。今まで出会ったことはありませんが。

中では吸血鬼こと我が屋敷の主（暫定）であるエウナさんに、自称魔法使いこと、いつの間にか住み着いていた来夢さんが後ろからもたれかかっていた。

エウナさんはいつもの黒を貴重としたドレスに金色の髪、来夢さんの方は…後ろからなので赤いコートと黒の髪しか見えないですね。それにしても二人とも綺麗な髪です。

ん？、いつもと何だか様子が変？来夢さんが照れたようにもじもじしてますし。

これは聞くしかないですね！これは盗み聞きではない、聞こえたのだ！どれどれ！？

「エウナさんエウナさん」

「ん？何よ？」

「えつとね…そのね…」

「だから何？大切なこと？」

「えつと、そうなんです…実は…」　ごくろ…なにやら緊張した雰囲気漂ってきます。そして何か桃色の気配が！この気配！まさか！

「実は…赤ちゃんが出来たの」

っ！？私の脳内に衝撃走る！え？赤ちゃんって何？

「そう、私たちの子供がついに出来たのね！」

そういつてエウナさんは、来夢さんの方へ振り向くと抱きしめました。

えっ？待つて何この展開？何時の間にそんなことが？

「それで…そのう…」

「ええ！こうしてはいられないわ！スグにでも結婚しましょう！」

私の混乱もよそに二人だけの世界は続いていく。アレ？エウナさんホントに？子供って何？というより女同士で子供とかできるの？吸血鬼だから何でもありなの？というよりあの子見た感じ子供なんだけどその辺どうなの？ハハッゲイリ！

どうする…ただでさえ幽霊屋敷とか言われて変な巫女とか坊主とかが除霊しに来て面倒だっていうのに…そこに吸血鬼だって！？しかも子供を孕ませたとか世間にわかった日には、我が屋敷の世間体というものが！…屋敷内に子供の叫びとかが木霊するんですかそうですか。いっそあの吸血鬼を殺して私の子ということに…私に出来るのか？いや、出来る出来ないじゃない！するんだ！

そこまで考えるとゆらりと力を集める、目標はあの吸血鬼！

「幸せに…してくださいね」

そういうと来夢さんは、幸せそうにエウナさんの胸へと顔をうずめた。

…幸せそうですね。私は体の中に集めた力を拡散させると、扉を開ける。まったく、あんな笑顔を見せられたら私にはどうしようもないじゃないですか。

「メリーっ！？何時からそこに！？」

「すみません、ご飯のメニューを聞きに来たら聞こえてしまいました」

「そう…それじゃ」

「はい、今晚は豪華にしますね♪」

そう伝えると食堂の方へと移動する。来夢さん、可愛かったな！。それにしても結婚式ですかー、来夢さんがドレス着るのかな？楽しみです。でも子供が出来るとなると、来夢さんがお母さんで、エ

ウナさんがお父さん、そうすると私は…

…おばさん？

いやいや、それはない、私はまだぴちぴちの少女である。幽霊だから歳を取らないから一生少女のままだとか、そういったことはどうでもいい。少なくとも私はまだおばさんと呼ばれる歳ではない！それに結婚なんてしたら、もう来夢さんをぎゅっとしながら撫で撫でしたり、一緒にお風呂を入っての背中流しごっこや、二人で夫婦生活をするおままごとなんかもができなくなるではないか！おのれ、許すまじきはあの吸血鬼…私から我が家の平穏を奪うどころか、我が癒しすらも奪おうというのか！

この結婚式…絶対に止めなければ…！

メリーは食堂にて、包丁を片手にそう決意するのであった。

□ □ □ □

ゴーンゴーン

協会の上にあるベルが、二人を祝福するかのように鳴り響く。

今日は結婚式当日、二人にとっては大切な思い出となる日である。その協会近くの空き地にて、黒のボディスーツ、片手にはヘルメットを抱えているという、いかにも怪しげな格好の人たちが集まっていた。

「それじゃ作戦は事前に通告したとおり…いいですね？」

その中では比較的小柄なリーダーの風の少女が緊張した様子で他の人の顔を見渡すと言った。

リーダー風の少女は、流れるような銀色の髪に緋色の瞳。今日はサイドに括弧することはしてないようである。ヘルメットを被るのだから当たり前か。

「すでに目標地点にはαチームが先行しています。時が来たら我々も向かわねばなりません。皆さんすでに戦いの準備は万全ですね？」
イエスサー！彼女の周りにいる人たちがそう叫ぶ。

「今宵、協会は戦場となる。…敵の力は強大であり、多くの仲間が命が失われるだろう。…それでも！我々には誰にも負けない強い想いがある！我々はどんな犠牲を払ってでも、アレを阻止しなければならぬ！」

皆その言葉を緊張した様子で聞いている。ここに集うのは皆、人里にて我こそはと集まった『来夢ちゃんを愛でる会』の勇士ばかりである。私語や話を聞いていないものなど一人も居ない！

そう、この連中、これから二人の結婚式をぶち壊そうとしているのである。

余談であるが、ここには『来夢ちゃんを愛でる会』の他に『メリーさんにいたずらされたい』の会のメンバーもいるが、団結に乱れないようである。

「ママー、あの人たち何してるのー？」

「しっ！見ちゃいけません！」

母親が我が子の目を塞ぎながら空き地を急いで通り過ぎた様だが、今ここに集うのは精鋭のみ！その程度で心は折れない！

そして銀髪の少女の激励も最後となり、ふと厳しい顔を緩め、優しく微笑むと

「帰ったら、皆で美味しいお酒でも飲みましょう」

ちなみに、そのときの顔を見た隊員の一部分が、ああ……ここに来てよかった……といった悟りの局地へと旅立ち掛けたのだが、彼女に気づく様子はない。

「では作戦開始！」

そして銀髪の少女は顔を引き締めると、ヘルメットを被り、戦いの号令を出した。

「こちらαチーム！こちらαチーム！βチーム、応答願う！」

「こちらβチーム！どうした！αチーム！」

「敵の力は巨大にて、我が隊はほぼ壊滅状態！これから生き残った隊員を集めての最後の陽動を行う！」

「ダメだ！αチーム！後はこちらに任せて帰還しろ！」

「ふっ……必ず……勝つてくれよ！」

「αチーム！αチーム！」

その通信が最後となりαチームとの連絡が途切れた。

「そんな……αチームが……」

その事実には呆然と立ちすくむ私、すると

「行きましよう！隊長！αチームの意思を無駄には出来ません！」

『行きましよう！』

『隊長！指示を！』

見ると傷ついて立てなくなった隊員までが、最後の力を振り絞って立ち上がると私の周りに集まっていた。

「みんな…」

「我々は…我々はなんとしても勝たなければなりません！さあ指示を！」

そう…そうよね。私は涙を堪えると、最後の命令を出した。

「全体聞こえるな！これからαチームが最後の陽動をする！おそろくこれが最後のチャンスになるだろう…全軍！突撃！」

そして最終決戦の幕が開いた。

□ □ □ □

以下おまけ

今までの話を壊したくない人は読まないほうがいいよ！

「はっ！夢か！」

飛び起きると場所は戦場でなく、見慣れたベットの…。どうやら来夢さんを抱き枕にお昼寝をしたまま今まで眠りこけていたらしい。

隣を見ても抱き枕の姿はない、先に起きたようですね。

窓を見てもういい時間、起きたばかりですが、ご飯の支度しましょう。

そう今後の予定を決めると、いつもの浴衣から割烹着にエプロン

姿へと着替え、部屋の外へと出る。どちらも来夢さんが自分のためにと買ってきてくれた、大切な服の1つ。

「今日のご飯は何にしましょうかー」

コツコツと廊下で何を作ろうか考えながら一人呟く。たまに肉料理もいいですねー、確か材料はあったような…うん、悩んでいても仕方ないので聞いてみることにしましょう。

「そーだんしよう♪そーしよう♪」

そう結論を出すと、屋敷の住人がいつも居るであろうテラスへと向かう。いつものように消えて出てもいいのだが、こんな満月の夜は歩きたい気分。

テラスに入る直前の扉の前で息を殺しながら外の様子を伺う。誰も逢瀬の瞬間になど出会いたくはないのである。今までで出会ったことはありませんが

ひよつこども！突入にはタイミングが命だ！気を抜くな！
イエスサー！

脳内で誰かの激励が飛ぶなか、うすーくドアを開けて外の様子を伺う。誰でも逢瀬の瞬間に興味はあるのである。今まで出会ったこととはありませんが。

中では吸血鬼こと我が屋敷の主（暫定）であるエウナさんに、自称魔法使いこと、いつの間にか住み着いていた来夢さんが後ろからもたれかるようにしてっ眠っていた。

エウナさんはいつもの黒を貴重としたドレスに金色の髪、来夢さんの方は…後ろからなので赤いコートと黒の髪しか見えませんね。それにしても二人とも綺麗な髪です。

ん？待てよ？この光景…どこかで見たような…。ハッ、さっきまで見ていた夢か！

となると次に出るのはあの展開！いかん！それは阻止しなければ！
 そう決めるや否や勢いよく扉をあけると、走りこみ右腕を振りかぶる。狙うはにつくき吸血鬼！

[illegible]

渾身の右ストレートが炸裂し、憎き吸血鬼はテラスの下へとぶつ飛んでいった。やった……！ ついにやったよみんな！

逆の手で愛しの少女の救出し、ぎゅっと抱きしめながらなでなで

「ほえ……？　メリーさん？　エウナさんは……？」

「あんな人はいいんですよ♪ほら、眠いなら私の胸を貸してあげますから」

「メリーさん柔らかくて気持ちいいー……」

まだ寝ぼけているのか、来夢さんはぎゅっとする私の胸に顔を押し付けると、すやすやと眠ってしまいました。ふふ、可愛い。

私はテラスの下から膨大な殺気が上ってくるのを肌で感じながらも、月を見上げる。

ああ……我が生涯、
一片の悔いなし！

俺たちの戦いはこれからだ！（後書き）

おまけがおまけになってませんが、無害です

少しでも楽しんでいただけたら幸い

そう、それはとあるきゅうりの戦いのストーリー（前書き）

魔のきゅうり回

甘い話を書けといわれたので・・・第1弾

オマージュ含みます

そう、それはとあるきゅうりの戦いのストーリー

月明かりに照らされながらテラスで本を読んでいると後ろから声を掛けられた。

「月が綺麗ですねー」

「ええ、ホントにね」

相手はわかつているので本から顔は上げずに答える、変わらないいつものやり取り。すると少し考えたような間が空いて

「エウナさんエウナさん」

「なに？」

何々？死亡フラグのさしすせそ？ほう…

「エーウーナーさーんー！」

「だから何よ？」

あまりにもしつこく話しかけるので、読んでいた本を置いて顔を上げると、目の前の駄々っ子に返事をする。

彼女の名前は…確か来夢だとか何とか。身長は150にもとどかない程度で白色のワンピースの上に赤いコート、月明かりを反射している黒の髪を肩のところで切り揃えてるが、両サイドの髪だけはやけに長い。

ぼーっと目の前の少女を見ていると彼女はじらすように待つと笑顔で言い放った

「ちゅーしましよ…」

ぶんつ、最後まで言わせずに左ストレートを放ち、右へと逃げた来夢を追う用に右腕で薙ぐ、狙うは花も恥らう乙女の笑顔、ちっ、これもかわしたか。

「ふっ、甘いですねエウナさん！いくら私でも一度見た技、そう何度も貰いはしませ…わっ！」

何か戯言が耳へと届いた気がするが気にせず、そのまま右手の回転を殺さずに後ろを向き本命の回し蹴りを放つ。

「危ないですねー、回りし蹴りはともかく他は当たったら死んじゃうところでしたよ？」

「変なこと言うからよ」

一瞬で目の前に来た来夢が頬を膨らませて文句を言う。慣れて居るのでそこは驚かない。それよりも

「あなたまた能力つかったわね？」

「能力じゃないもん、魔法だもん」

「はいはい魔法ね魔法…あの程度、あなたなら時間を止めなくても避けれたでしょう？」

そういいながら目の前に居る彼女を抱きしめる。まったく…こんなに冷えてるじゃない。

「だって普通に避けたらエウナさんの顔が見えないんだもんー、もんもんーん」

おとなしく抱かれてる様はネコみたいね、気まぐれで動く辺りと

かそっくり。このまま黙ってれば可愛い愛玩動物なのだけれど

「それじゃ、ちゅーしましょう!」

いつその舌、抜いてしまおうか?

「なんでいきなりキスなわけ?」

「ん?ん…」

そう問うと来夢は少し考えるしぐさをしたあと

「だってエウナさんちゅーけつきじゃないで…いたひいたひ力強い
ですから!抱きしめるのは嬉しいですが優しくして優しく!」

「反省した?」

「ちゅーしてくれたら反省す…痛い痛い!折れる!折れちゃう!ボ
クの心より先に体が折れちゃう!」

折られると困るので力を緩める、真っ二つになると大変じゃない?
主に服とか。

「だってエウナさんにとってはボクと過ごした時間なんてほんの一
瞬じゃないですか」

…そう呟くと来夢は私の背中に手を回すときゅつと抱きついてき
た。冷たい体、小さな体、確かに吸血鬼の私の寿命と比べるとこの
子と過ごした時間なんて一瞬かもしれない。でも、

「いやー、こんな夜中からアツアツですねー」わわっ

聞きなれた声がしたのでとっさに近くにあった本を投げつける。

受け止めやがった

「もー、本は大切にしないとダメですよ？」

「あ、メリーさんだー」

そういつと来夢はじたばたと私の腕から抜け出すとメリーさんと呼ばれた浴衣を着て銀色の髪をサイドに括った少女の下に掛けよる。

「聞いてくださいよーエウナさんったらちゅーしてくれないんですよー」

「あらあら、子供じゃあるまいしキスくらいしてあげればいいじゃないですか」

「五月蠅いわね、何かよう？」

大体の用は思いつくが、聞かなければずっとその話が続きそうである。

「はい、一応食事の希望を聞きたいと思ひまして」

食事の希望？家に希望が取れるほど食材はあったかしら？

「ボクお肉がいい！」

「魚肉ですね？」

「ス、ステーキが…」

「魚のステーキですね？」

「…お肉の丸焼きが…」

「魚の塩焼きですね？」

「は、はん「来夢、諦めなさい」」

あまりにも見てられなかったので思わず止める。希望も何も魚し

かないんじゃない。

「…お魚でいいです」

「はい、それでは食事が出来次第呼びに来ますね」

そういつと彼女はドアから出て行った。何しに来たのかしら…

「うつ…お肉…」

期待を持たされた分、こつちも割りと重症の用である。

「ないものはないんだからしょうがないでしょう」

ひざ枕をしながら適当に来夢の相手をしながらの読書を再開する。ちらりと見ると目が眠そうに閉じかけていたのでいずれ静かになるでしょう。

□ □ □ □

「私メリーさん、今台所に居るの」

「そこに居るじゃない」

しばらく読書を続けているとメリーが突然現れた。

「今の私は残像だ、本体は台所に居る！」

「はいはい、来夢起きなさい、ご飯が出来たみたいよ」

「うつ…エウナさんが冷たい」

メリーのことを無視して来夢を起こすとしくしくと泣きながら消えていった。特に問題はないでしょう、残像らしいし。

「うにゅ、エウナさん？」

「起きたらどいて、食事が冷めるわよ」

「ちゅーはー？」

「はいはい後でね」

寝ぼけてる来夢を適当にあしらいつつ食堂に入ると食器の上に焼き魚が乗ってるだけだった。まて、魚だけ？他には？

「あ、来たなら早く席に着いてくださいね、ご飯よそいますから」
見るとメリーが浴衣にエプロンという格好でしゃもじを片手に炊飯器のご飯をよそっていた。

「魚しかないように思えるのだけど」

「お魚じゃないですよ？」

「…他には？」

「あ、お漬物ならあるので出しますね」

…状況を整理しよう、食器の上には魚、漬物もあると言った。つまり？

我が家の食糧自給はそこまで窮地に立るということね！

「わーい♪お魚だー♪」

「来夢、明日買い物行きましょう」

「でーと？」

「デートでも何でもいいわ、このままだと明日の食事が危ない」

「わーい♪でーとだ♪でーとだー♪」

未だに頭が完全に覚醒してない用だけどきつと大丈夫だろう。たぶん…

「はい、お漬物ですよー」

そういつとメリーは食器を持ってきた。テーブルに置かれた食器の上ではきゅうりに着いた目が状況の確認をしようとばかりにきよるきよるしている。きよるきよる？

「…何これ？」

「何言ってるんですかきゅうりですよ」

きゅうり…？知らない間に世の中の野菜と言つものは変わったのだろうか…きよるきよると世話もなく辺りを見渡すきゅうりを見つめると目あつたのでゆっくりと目をそらすと来夢に聞いてみた。

「来夢、これ、何に、見える？」

片言なのは仕方ない、こんな変なものと目が合ったのである、動揺などしていない。

「きゅうりですか？美味しそうですよね」

「でしょう？美味しいですよー」

そういつとメリーはきゅうりの方を見る。きゅうりの方は聴覚があるのか自分たちの置かれた立場を理解したようで、さつき以上に目を動かしている。あ、今日が合った。

「ちょっと！今すごい勢いで目そらしたわよね？」

「ナ、ナンノコトデショウカ？さ、早くご飯にしましょうねー」

「はい」

どうやらこのきゅうりについてはこれでおしまいのもので、3人でいただきますをすると食事が始まった。

私もこれ以上突っ込みたくなどないのでさっさと食事を済ませることにする。

「あ、メリーさんお醤油取ってくださいな」

「どうぞどうぞ」

「来夢、こぼしてるわよ」

「わわっ」

そうなれば後はいつもの食事の光景、魚しかおかずがないことなど始まってしまえば問題はない。あときゅうりはなるべく見ないように中央において放置。触らぬ神に祟りなし。

きゅうりという変なものはあるが和やかにいつもの食事が続いていたが

「あ、メリーさんそのお漬物取ってくださいな」

その一言で空気が凍りついた。

「た、食べるんですか？」

「うに？食べれないんです？」

「冗談ではない、あんなものを食べるところなんて見せられたら食欲がー気になくなってしまふ。見るだけでもなくなるというのに

「あ、はいどうぞ」

渡すのかよ！このままでは私の食事が危ない

「来夢、お漬物は食後にしなさい」

「えー、なんでなんでー」

いつもは聞き分けがいいのになぜこんな時だけ反抗するのか、
いつそ殺ってしまうか。

「あー、お漬物は食後の口直しとしてお茶と一緒に食べると美味しいんですよー」

「ほえー、そうなんですかー、それじゃご飯が終わったら食べましょう」

（ナイスよメリー！）そう目で語りかけると

（私だってあんなものを食べる姿は見たくないですかね）と目で返してきた

以下は目での会話である

（ところであのきゅうり何なのよ）

（知らないですよー、私は普通につけただけですし）

（普通につけてあんなになるものなの？）

（もう誰かが何かしたとしか…）

「ほえ？」

そこまで目で会話すると一斉に来夢の方を見る。

（（原因があるとしたら…もうコイツしか））

そして仮初の平穏にも終わりが来たようで、食事が終わってしまった。
った。

「ご飯も食べましたし食べてもいいですよね？」

「ほ、ほんとに食べるの？」

「ダメ……？」

そう聞くとまるで捨てられている子猫の用にこちらを見てきた。もう、私たちに彼女を止めることは出来ない。でもきゅうり、あなたは無理よ、お願いだからこちらを見ないで。

「ではではいったただったきまーす」

そういつと来夢は1本のきゅうりを箸で掴んだ。掴まれたきゅうりは己が選ばれたということに助けを求める視線を私たちに振りまき、残されたきゅうりは安堵と絶望の入り混じった視線をきゅうりへと向けていた。

そしてきゅうりがこれから己へと降り注ぐ感覚に絶望の視線を周りに降り注ぎながら来夢の口の中へと入ると来夢の口が閉じられた。しゃくしゃくと音が鳴るたびに箸に挟まれているきゅうりの半身がびくびくと動いていたが、やがて動かなくなった。

「んう？ん……」

「ど、どう？」

どんな味なのか、そもそも食べれるのか、むしろ毒じゃないのか色々な興味が来夢へと振り注ぐ。

「メリーさん」

「は、はい！？」

来夢はゆつくりと口に残ったきゅうりを飲み込むと

「これお砂糖と間違えてません？甘いんですけど」

「え？そんなわけが…」

そういうとメリーは来夢が半分食べたきゅうりを口に入れるとしゃくしゃくと咀嚼し始めた。

「あ、ホントだ、甘い」

□ □ □ □

関係ないですが死亡フラグのさしすせそさつさといけ！ここは俺が食い止める！

死にたいやつはここにいろ！俺は部屋に戻るからな！

好きだったぜ、お前のこと

戦争が終わったら俺、結婚するんだ

そんなことないさ、俺が見に行つてやるよ

□ □ □ □

以下おまけ

甘さが足りないならどうぞ

食事が終わった後に、さっきと同じテラスで月を見上げていると

「エウナさんエウナさん」

「…何よ？」

「ちゅーはー？」

「は？」

何を言ってるのだろうこの娘は？

というよりその話まだ続いていたのか

「無しよ」

答えないと五月蠅そうなのはつきりと伝える、だが

「えー、エウナさん後でつて言つたー」

「…そんなこと言つた」

「言つたもん！ボクちゃんと聞いてたもん！」

こうなるとこの子はしつこい、無視し続けると膨大なケンカに発展しかけない。それにしてもキスね……そういえばあの話の答えはまだ言つてなかったわね。どう言おうか…

「言つた言つたーエウナさんの嘘つきー嘘つ…んぐっ！？…えへへー」

とりあえず近くで騒ぐ来夢をキスで黙らせると強く抱きしめる、壊さないように、離さないように、大切に囁く。

「…確かに私にとってあなたと過ごした時間はほんの一瞬かも知れない…でも私たちに取って大切なのは時間じゃないでしょう？」

「そう…ですね」

そう、私たちに取って時間の長さは問題ではないのだ、だってそうでしょう？吸血鬼と人間、全体で見るなら感じる時間は違えども流れる時は同じなのだから。焦る必要は、ない。

そう自分に言い聞かせると私は来夢を離した。

「わかったらそんなに焦らないの」

「つまり頼めばちゅーしてくれると!」

そういつと来夢は月の方へと向いた。

こいつ…沈めてやろうかしら…

思わず握った拳を叩きつけようかと思ったが、その背中があまりにも小さく、そして震えてるのを見てやめた。

「考えとくわよ」

そういつてその小さな体を後ろから包み込むように抱きしめる。もう震えることがないように、ぬくもりを伝えるように、後悔を残さないように。

「…えへへー♪エウナさんはやさしーなー♪」

重なり合う2人を月が優しく照らしていた。

そう、それはとあるきゅうりの戦いのストーリー（後書き）

きゅうりのお漬物おいしいですよね！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです

初日の出っただいてい寝てますよね（前書き）

正月ねたを正月過ぎてからあげる暴挙

久しぶりに人物表 ム（>ω<）ノシ

来夢^{ライム}

人間 鳥目 ペたぺた

エウナ

吸血鬼 割と怪力 ぼんきゅっぼん

メリーさん

幽霊 意外と多芸 ないわけでは…ない

初日の出っただいてい寝てますよね

いつものテラスにて、なんとなく人里のほうを眺めながら一人紅茶を飲む。

「月が綺麗ですねー」

「ええ、ホントにね」

突然の問いに星空へと視線を向けながら、いつもの様にそう答える。ふむ、今日は新月なのね…通りで暗いわけだ。

実際のところ、新月の日に月が綺麗も何もないのだけれど、この子鳥目だかで暗い場所だとほとんど目が見えないらしいから気づきようがないんでしょう。

その事実を知った時、目が見えないのに何で生活できてるの？と聞いたことがある。何でも、モノから発せられる気配と魔力、そして音なんかを頼りに生活してるらしい。訓練すれば誰でも出来るようになるとも言っていたけれど…できればご遠慮願いたいわね。暗闇になると目が見えなくなる吸血鬼なんて本末転倒である。風の噂ではそんなのもどこかに居るらしいけれど…

そこまで星空を見上げて思いを馳せてから、少女へと視線を向ける。少女は145程度の小さな体にフリルの付いた赤いドレス、さらにその上からはサイズが合わないのだろうか、裾が膝丈まであるこれまた赤いコートを着ている。幼さしか感じられない白く小さな顔に、見ていると深く沈み込むような黒さの髪と瞳。何度見ても綺麗な顔つきね。

「今日は新月だから月は見えないわよ」

特に意味も無いけれど、一応知らせておく。

「ありやりや、そうでしたか」

「ええ、そうなの。紅茶飲む？」

「頂きます」

来夢が席に座ったのを見てからティーカップへと紅茶を注ぐ。実際、ただの儀式みたいなものなのだから、この子は目が見えていたとしてもやり取りは変わらないのでしょうね。

私たちにとって、新月だろうが曇っていようが関係はないのである。でも曇ってるのはダメね、月見も星見も出来ないじゃない。

「エウナさんエウナさん」

「何？」

「今日は星が綺麗ですか？」

「ええ、満天の星空ね」

そうですか、とティーカップを両手で包み込むようにして持ちながら星空を見上げると来夢は呟く。そのときの彼女の顔はどこか虚ろで、まるで意識だけがどこか別のところへと旅をしている様子。

今、彼女の漆黒の瞳には何が写っているのかしらね。案外、見えないなら見えないなりに見える世界があるのかもしれない。…自分で考えてて混乱してきたわ

「そつえば年末ですよ年末！」

あ、現実に戻ってきた。…年末ってアレよね？オシヨウガツとかオオミソカとかオオソウジとかで騒ぐ人間のお祭りみたいなもの。ちなみに、毎年私たちは年末とか関係なしに寝て過ごしている。…元々、年とか月とかという感覚は私たちにはないのだ。ああいう

のは寿命の短い連中だからこそ意味があるのだろう。

感じるのは季節だけ、それは今までも、そしてこれからも変わらないでしょうね。ちなみに、今年も例外はなく、すでに新年は始まっているはず。

「年末って…もう年は明けてるん…ってちょっと！何するのよ！」

そこまで言った辺りで突然彼女は赤い顔をしながら手に持っていたカップをこちらへ向かって投げつけてきた。危ないわね、幸い中は空だったから服は汚れなかったけれど…さすがに真冬に濡れた服で居るのは辛い。

「エウナさんのバカー！気づいてたなら先に言って下さいよ！」

馬鹿はお前だこの幼児体系め、3日くらいは外を歩けなくしてやるうか…。大体、あなたも気づかないで一緒に寝てたんでしょがふう…私に非はないので怒ってもいいのだけれど、害も無かったので少しヒビの入ったカップをテーブルへと戻す。…害あるじゃない！どうするのよこのカップ！替えはあるのだからいいけれども。集まっている面子の種族や性格がアレなのである。カップなど人数分以上に用意していなければ、数分持つかも怪しい。

割れたカップを戻して次のカップを選んだ辺りが、なにやら騒がしい。

まで寝るな！今寝たら死ぬぞ！誰か！誰か来てくれ！メディイイイイク！

絶対に帰ってくる！だから、もし帰ったら…俺と結婚してくれ！

「そ、そういえば、年明けですよ年明け！」

何も無かったことにして進めるみたいね。

「年明けだからどうしたのよ？」

新しく選んだカップへとティーポットを傾けながら聞いてみる。
それにしても拘るわね…あ、紅茶が切れた。新しくお湯を取りに行くのも面倒だし、どうしようか。

「初日の出を見に行きま」ダメよ」「

最後までは言わせない。

「えーなんですかー？」

「あなたも私の種族は知ってるでしょう？初日の出なんて見に行くの、私は嫌よ」

「エウナさんの種族って…ちゅーけつき？」

ピシリ

手に持つてるカップにヒビが入る。ああ…コレもダメね。それにしてもこの娘…一度体に教え込む必要があるのかしら…。

「エウナさんったら♪体にだなんて…そんな卑猥なこと…」

突然後ろからした声に、手の中の割れたカップを投げつける。カップは避けられても中身はそうもないでしょう。

投げられる直前に、ヒビの入ったカップが残されたカップへとそう伝えた。

故郷のあの子に伝えてくれ…約束、守れなくてごめんって…

までっ！逝くな！逝くんじゃない！結婚するんじゃないの！
よ！おい逝くな！

「あつ熱い！熱い！エウナさんの愛が熱い！」

熱い紅茶を頭から被って悶えてるのは浴衣姿の少女。透けるような碧の瞳、闇に浮かぶ銀色の髪は頭の上でサイドに括っており、彼女が動いたときに藍色の浴衣に描かれた雪模様が夜闇の中を踊っている様で綺麗ね。それはともかくこの幽霊…さつさと成仏してくれないかしら。

「まだ成仏する気はないですよー？はい、新しいお湯」

「ありがと、あと勝手に人の心を読まないでちょうだい」

「愛し合う二人は以心伝心ってことですね、熱い！エウナさんの愛が熱い！」

「むー！エウナさんと愛し合うのはボクだもん！メリーさんに渡さないもん！」

「ふっ…それでは今日から私たちはライバルということですね！」

来夢、いちいち反応するな。そしてメリーもいちいち挑発するな。

「それでどっちを愛してくれますか？」

「あなたたち、少しは静かに出来ないの？」

そう言うと、二人とも沈み込んだまま動かなくなった。動けば動くで五月蠅いし、静かなら静かで鬱陶しいのねこの子たち。

「ところでエウナさん、初日の出くらい見に行つてあげてもいいじゃないですかー。死ぬものでもないのだし」

「いいんですか！？」

先に復活したメリーが私にそう聞く。それを聞くや否やもう一人も復活した。きっと誰かがアレイズでも順番に唱えたのだろう。

「嫌よ、死ななくてもアレは生理的に嫌なの」

そう、別に吸血鬼だからっといっても日の光に当たったから死ぬわけではない。実際、日傘を差して昼間に活動する吸血鬼もどこかに居るらしい…が、死なないからわざわざ昼間出歩くというと、それとこれとは別問題。ましてや朝日なんてもつてのほかである。日傘がほとんど意味なさないじゃない。

「大体、メリーなら言わなくてもわかってるでしょう」

「日の光が嫌なんですか？それなら！ボクの開発した日傘ロボット ジェントルマン2号がばばんと解決します！」

そういつて手を指し示すので、その先を反射的に見る。すると、地面から煙が立ち始め、煙が晴れるとそこにはまるでドラム缶に手足をつけたようなロボットが現れた。ロボットは動きにあわせてピコピコと目が光輝いており、手には日傘が持たされている。このバカ、また変なもの作ったのね…

「おおっ、かつこいいっ」

「お、このよさがわかるとは…やりますね！」

「ところで、2号ってことは1号も居るのよね？」

ふと気になったので盛り上がっているバカ二人を無視して聞いてみる。するとメリーはどこか遠い目をしながら

「1号は…旅に出ました」

「…ピーピーガガ」

2号がどこか悲しむように鳴り響く。聞けば1号にはステルス機能をつけた直後にケンカをし、そのままステルス機能を発動、後は音信不通となり作った本人にも居場所がわからなくなってそのままらしい。つまり自分の作ったロボットとケンカをしたところ、これまた自分のつけた機能によって見つからなくなり、しょうがないから放置したらしいということだ。バカだ、ここにバカが居る。

「でも私は信じてます！いつか1号が私の傍に帰ってくるということを！」

「ガガガ、ピー！」

「感動です！ボクは！ボクは感動しました！」

「ガピー！ピーガ！」

それにしても五月蠅いわね…このロボット。

「それで？そのロボットが何だった？」

「ジェントルマン2号です」

「ガガ！」

「何だか日傘ロボットとか言ってたけれど？」

「ジェントルマン2号です」

「ガガ！」

「ホントに解決するの？」

「ジェントルマン2号です」

「ガガ！」

「…そのジェントルマン2号が何をしてくれるのかしら？」

…どうやら名前を言わない限り質問に答えてくれないらしい。コレでしょうもない能力だったら…ふふ、どうしてくれようかしらね。

ちなみに来夢はひとしきり騒いだら眠くなってきたらしく、カップ片手に頭がこっくりこっくりと舟をこいでいる。

「もちろん！この日傘ロボットジェントルマン2号は日の当たる位置を自動的に感知しその手の傘でシャットダウンッ！対象者に届く日の光を一切カットします！」

「…その日傘、完全にカットするには明らかに小さいと思うのだけれど？」

そう聞いてみるとメリーは数秒日傘を見つめ、てへっ　と笑った。

「ピガー！」

「ジェントルマン2号ー！」

殴った、立ち上がると助走を付け、全身全霊を掛けて殴り飛ばした。そして庭へと吹っ飛んでいくポンコツ。

「ふっ…甘いですねエウナさん、このジェントルマン2号は1号とは違い衝撃吸収機能も搭載済み！その程度の衝撃ではダメージは与えられません！」

「何だか庭でバカみたいに腕を伸ばして回っているけれど？」

「ジェントルマン2号ー！」

それにしてもメリーの言ったとおりホントに頑丈ねあのポンコツ。もう2度と立ち上がれない様にするつもりで殴ったのだけれど…スクラップにするためには後1つ止めが必要か。

「来夢、ちよつと」

「うにゅ…はい？何ですかエウナさん？」

「ペンダント貸してくれない？その、首に掛けてある…」

「いいですよー、はい、どうぞ」

「ありがと、ちなみにコレ、どれくらいの硬さ？」

「んー…すつごく!」

「具体的に言うത്？」

「エウナさんが本気で壊そうとしても無理なくらいですかねー？」

ふむ、それだけの強度があるなら平気でしょう。念のため力を込めてみるが話は本当らしく壊れる気配はない。

早速よよよよー、と嘘なきをしているメリーの隣に立つとペンダントを振りかぶる。

「ジャンクになりなさい!このポンコツ!」

「ボクのペンダントー!」

ペンダントは私の狙い通りにポンコツの頭を貫いていった。ポンコツはペンダントが貫通すると、ばちばちと電気を出しながら倒れ、やがて盛大に爆発した。…大丈夫よね?あのペンダント

「ジェントルマン2号…何処へ行っても元気に生きるんですよ…」

「ボクのペンダントが…」

私は沈んでいる後に憤るであろう来夢をどうあやそうか考えながら、ポンコツの爆発した後を静かに眺めていた。

□ □ □ □

「エウナさん酷いです…」

「悪かったわよ」

あの後ポンコツの破片の中からペンダントを無事救出し、来夢へと返したのだが、やはり機嫌はすこぶる悪く、ずっとこちらのほうを向いてくれない。

「大切なペンダントだったのに…」

「本当に悪かったわ」

「大切なジエントルマンだったのに…」

「それはアレがポンコツだったのが悪いんでしょう」

ひ、酷い！と言って嘔泣きをするメリーを無視しながら未だこちらを向いてくれない来夢の頭を撫でる。まいったわね

「もう…エウナさんなんて知らないです！」

「そう、それじゃしょうがないわね」

「ほえ？」

知らないのならもう私にはどうしようもない、無駄なことにはあまり時間を省きたくないのである。夜は意外とあっさり終わるのだから。

「メリー、今晚の食事は何にするの？」

「あ、あの？エウナさん…？」

「そうですねー…お魚はばかりでしたしお肉か…ケーキという選択肢も？」

「食事なのにケーキ？甘ったるいわね」

「そのう…エウナさん？」

「甘さは控えめにしていますから、大丈夫だと思いますよ？」

「そう、食後にケーキという選択肢は？」

「エウナさん…」

「それは…ないですね。お腹いっぱいになっちゃう気がします。それにデザートとしては少し量が多めですから」

「ふむ、ケーキか肉か…ね」

「エ…エウナさん!」

「何?」

突然来夢が声を張り上げた、そんなに大きな声出さなくても聞こえるわよ。

「へ?あの、そのう…!」

そして反応すると、途端にもじもじとし始める来夢。だから何が言いたいのだよ。

「あ、あの!ギユってしてください!」

「はいはい」

ギユツとしろとのご志望なので来夢のことを抱きしめる。

「はふう…」

「満足した?」

「はいい…」

とけたような声で来夢が返事をしたので体を離す。

「エ…エウナさん!」

「五月蠅いわよ」

「そんな殺生な!…」

突然声を張り上げたメリーに返事をしてから、未だにとけたよう

な表情をしている来夢に話しかける。

「初日の出、見に行くわよ」

「ほえ？いいんですか？」

「ペンダント、大切だったのでしょうか？それくらい付き合うわよ」

「え、えへへー」エウナさん大好き」

「そうと決まったら少し眠りなさい、出発するときに起こすから」

「ひざまくら？」

「はいはい、どうぞ」

初日の出までの道中で寝られてはたまらないので来夢を寝かす。
それにしても初日の出ね…うん、たぶん大丈夫でしょう。

「メリー、聞いてたわね？食事は向こうで食べるわよ」

「あいあいさー、場所はどうしますか？」

そういえば場所ね…特に思いつかないわね。ここじゃダメなのかしら？

「あなたいい場所知らない？」

「少し上ったところに桜の密集してるところがあるので、そこがいんじゃないかと」

「そう、それじゃそこにしましょう。悪いけど私が準備してる間、この子のことお願いできる？」

「喜んでー」

それでは私は先に準備しておきますねーと言ってメリーは透けるように消えた。

ところで日傘…何処に閉まったのかしらね。

私は膝の上で眠る来夢の頭を撫でながら記憶を巡らせながらメリ

ーが帰ってくるのを待っていた。

□ □ □ □

「エウナさんメリーさん、早く早くー」

「はいはい、わかってるからそんなに走らないの」

山道の上のほうで振り向いて私の方を見る来夢へとそう答えると、日傘を片手にゆっくりと追いかける。

「そうですよ…来夢さん…道は…長いんですから…ゆっくり…行かないと…」

「…少し休憩する？」

「へ…平気…です」

「そう…」

隣ではげえげえ言いながら大量の荷物を抱えたメリーが登っている。途中で倒れたりしないわよね？そうなると面倒だからやめてほしいのだけれど…

「ところでその荷物何よ？明らかに食料以外もあるわよね？」

「お…酒…」

もう、何も言っまい…

「エ、エウナさん…まっ…」

酒の亡者の言葉を無視して先に進む。あら、けなげにも上で来夢

が待つてるじゃない、これは早く行ってあげないといけないわね。

「荷物…少し…持って…くれたら…珍しい…お酒を…」

「あら？メリー辛そうね？貸しなさい、少し持ってあげるから」

その言葉を聞くや否やメリーの荷物を持ってあげる。珍しいお酒ね、楽しみだわ。

「はーやーくー！」

「わかってるからそう急かさないの」

何度も私たちを急かす来夢に返事をしながらも山道を登っていくと、いつしか開けた広場へと着いた。

「……？」

「はい…そうですね」

見ると来夢はものめずらしそうに広場の中を駆け回っている。あの子…日の出までちゃんと持つわよね？

「それじゃ少し休んだら食事にしましょうか」

ちなみにメリーの用意した食事メニューはケーキに漬物という意味のわからない組み合わせ…この幽霊、一体何を考えてこのメニューにしたのかしら…というより何にでも漬物を出すのはやめなさい。来夢は気にせず食べていた。そういえばこの子って好き嫌いとかあるのかしらね？

「あなた嫌いなものとかあるの？」

「うに？ん…ムシムシは少し苦手ですね」

虫なんてほとんどの人は苦手どころか食べれないわよ…。しかも
苦手であって食べれないというわけではないらしい。あなた、私た
ちのどこに来るまでの旅はどんな食生活してたのよ…

「来夢さん…いっぱい食べてくださいね」

見るとメリーも少し涙ぐんでカブの漬物を差し出している。この
子…だからこんなに小さいのね。

食事も終わり、後はいつもの如く酒盛りとなる。

「そういえばメリー、珍しいお酒はどこ？」

「んー？そんなこと言いまし…やめて！そのお酒に罪は無いの！割
らないで！」

酒瓶に力を込めようとすると、メリーは荷物の中からごそごそと
1つのビンを出してきた。最初からそうしてればいいのよ。

早速開けるとポンつと子気味いい音がして中身が少し溢れてきた。
ふむ、これは…やはりグラスに注ぐとシュワシュワとした液体が出
てくる。

「おおー、しゅわしゅわしてるー」

「へえ…シャンパンじゃない。よく手に入ったわね」

「でしょー？人里まで遊びに行ったら知らない人がくれたんですよ
ー」

これも日ごろの行いがいいからですねー、とか笑いながらシャン
パンを口にする。…それはないとしても、意外と人気あるのよね、
この子。

「そういえば！この辺は春になると綺麗な桜でいっぱいになるんですよー」

「ほえー、エウナさんエウナさん！」

「はいはい、裾を引つ張らなくても聞いているわよ」

「夜桜見に行きましょう、夜桜ー」

「夜桜ですかー、いいですねー」

「…考えとくわ」

そうは言ったものの…夜桜ね、断る理由もないしたまにはいいか。しばらくそういったやり取りをしていると案の定、来夢は眠くなつたようで私の膝を枕に眠りへとついた。まったく、はしやぎすぎよ。

その様子をメリーがうらやましそうに見ていた気がするけれども、気のせいということにしておきましょう。

「あ、そろそろ初日の出ですね」

「ほら来夢、起きなさい」

「うにゅ…おはようのちゅー？」

「…ほら起きなさい」

「えへへー♪起きるー」

「エウナさんー、私に対してのおはようのキスはー？」

「地面がお好み？」

「うっ…不公平だ」

起きるや否や寝ぼけて甘えてくる来夢をあやしてつつ、寝転がって目を閉じてるメリーの対応をする。いい加減目を開けなさい、蹴り飛ばすわよ？

「エウナさんエウナさん」

「何よ」

「メリーさんのこと、嫌い？」

「どうかしらね」

「嫌いだからエウナさんはちゅーしないの？」

来夢は目に涙を溜めながら私にそう聞いてくる。あーもう！わかつたわよ。

「っん！？」

「お目覚めかしら？」

「え…？あの？今…何を？」

「ほら起きなさい。もうすぐ日の出よ」

「あ…はい…」

寝転がってるメリーにキスをして起こすと、ようやく顔を出した日の出を眺める。何だか隣のほうで小さく初めてだったのに…とか聞こえてきたけれど気のせいよね？気のせいのはずだわ、気のせいということにしよう。

それにしても…わかってはいたけれど最悪の気分ね。日の光が正面からくるから日傘なんて大した効果も出してはいないし。それでもまあ

「初日の出だー」

「初日の出ですねー」

隣で騒ぐバカ二人を見てると一年に一度くらいはいいかなと思えた。

「ところでエウナさん、ボクたちの他に何か居るんですか？」

「へえ？それは具体的にどの辺り？」

そう聞いてくる来夢の言葉にピンと来た私は彼女の指し示す空間を思いっきり殴り飛ばした。私を闇討ちしようだなんていい度胸ねポンコツ、お礼として2号と同じ場所に送ってあげるわ。

「ジェントルマン1号ー！」

初日の出の明かりの中、メリーの悲鳴がこだました。

初日の出っただいてい寝てますよね（後書き）

ほのぼの目指したら甘いといわれました
（ ・ ・ ・ ）ぷっぷくぷー

少しでも楽しんでいただけたら幸いです

く最終回く（前書き）

一応最終回です

ということで人物表ぐ（>ω<）ノシ

来夢^{ライム}

人間 魔法使い あらゆるものを凍結することが出来る能力あり

エウナ

吸血鬼 屋敷の主 吸血鬼だけれど退魔の能力アリ魔法とか壊せま
す 他の吸血鬼から疎まれてます

メリーさん

幽霊 屋敷の管理人 エウナとは旧知の仲

氷華^{ヒョウカ}

死人 来夢の幼馴染

空^{ソラ}

お姉さん 来夢に色々教えた人

く 最終回 く

く 来夢ちゃん く

部屋に入るとベッドの上で金髪の女性が血まみれで横たわっていた。ベッドに張り付けるかのように剣が突き刺さっている光景はまるで昆虫採集の標本のようで、その体はびくりとも動かない。きつと確認しなくても息はないんでしょうね…

そしてそのベッドの方を、3人の男が静かに見下ろしていた。一人は長身で、一人は丸々と太っており、もう一人は小柄な男たち、おそらくはどれもがどれも吸血鬼なのであろう。

そして、その光景が闇に沈んだかと思うと目が覚める。まったく、最近はいつもこの夢ですね…でも、やっと顔がわかりました。

ゆっくりと体を起こして外を見るとまだ夕方になったばかりなのか、夕焼けの赤い光がカーテンを照らしています。あかい…ひかりが

『いいね？。〇〇、私はこれから君に色々なことを教えるけれど、まず最初に君に掛かっている封印を解く呪文を教えておこう』

そういってお姉さんはボクの顔を両手で挟み込むようにすると

『正直言って私は、君の封印はそのまま解くべきではないと思う。でも、その力は君のものだ、勝手に封印してそのままというのはあまりにも無責任すぎるだろう？』

お姉さんはそのまま真剣な顔で続けます。

『けれど忘れないで、今でも君の目は成長を続けている。だからも

し封印を解いたらそのとき君は…もう人とは呼べない存在になる』

ボクはそうなる何かいけないことでもあるの？と聞きました。
そうするとお姉さんは悲しそうにボクのほうを見ると

人でなくなり、他の何にもなれなかったものは…簡単に死ぬこと
すらもできなくなる

”失われし我が名の下に命ずる”

バンツ

そこまで流れた辺りで強引に頭を殴って過去の回想を振り切る。
まったく、これからが大変だというのに…難儀なものですな。

どれだけの時間ソレを見ていたのか、窓の外ではすでに外は暗く
なっていた。そのままゆっくりと立ち上がると今日は何を着ていこ
うかと考えをめぐらす。

このままでもいいんですが…やっぱり正装がいいですか。

そこまで考えると、ワンピースからフリルのついた赤いドレスに
着替え。その上に赤のコートを羽織った。

「それでは、いってきますね」

部屋を出る直前に、まだ眠っている彼女へと向けてそう囁くと扉
を閉めた。

そしてコツコツと月明かりに照らされている廊下を歩きながら玄
関を指す。身の回りのものはほとんど片付けてありますし…たぶ
ん忘れ物もないでしょう。今さらあったとしても無駄ですが。

そんなことを考えているといつしかホールまでたどり着いており、

急に後ろから声をかけられた。

「お出かけですかー？」

ふう…誰にも知られずに出るつもりでしたが、やっぱり無理でしたか。

「はい、綺麗な月なので少し外に出ようかと」

「あらー、そうなんですかー。いい月ですものねー」

そう答えると玄関に手をかける。嘘は付いてません、ただ出て何をするかを言っていないだけ。

「そのまま…帰ってこないつもりですか？」

「どうでしょうね、できれば帰りたいと思ってますが…不慮の事故というのは何時起こるかわからないですから…」

振り返ることはせずにメリーさんの対応をします。あ、一つ忘れ物をしてました

「そうだ、一応お願いを聞いてもらえます？」

「嫌です、それくらい自分でしてください」

「エウナさんを外に出さないでください」

「私の言ったこと聞こえてましたか？」

「あとは…もし出来なかったらボクの変わりに記憶の凍結をお願いしますね。仕込みはすでに済んでありますから」

「…それを聞いて私がすると…してくれそうですよね？」

メリーさんの言葉を遮ってそういうと、返事は聞かずに玄関から外へと出てゆつくりと歩き出す。悪いこと押し付けちゃいましたね。

まあ、仕方ないですか。さてさて場所は…上のほうですか、ちょうど皆で初日の出を見たあたりがちょうどいいですか。

それにしても、今日は月が綺麗です。

変なものがいつかの時よりも少し増えているような気がしますがお姉さんの言うとおりなら気のせいではないんでしょう。

空を見上げると赤い満月が笑うように辺りを照らしていた。

本当に、死にまみれた世界ですね。

目的としていた場所に着くと、木の裏で息を潜める。ふむ、まだ来てないみたいですね。空は…ふむ、こっちもまだですか。

どれくらいそこでそうしていたのだろうか、しばらくすると広場の方に3人の男が居るのが見えた。男たちは1本の剣を持っており、一人は長身、一人は丸々太っており、もう一人は小柄であった。この中で一番怖いのは…たぶん長身の人でしょうね。

そこまで思考を済ませると、ペンダントを短刀へと変えた。

さあ、殺し合いを始めましょうか。

軽い深呼吸をすると隠れていた木から飛び出し、太っている一人のお腹へと短刀を切り付ける。そして、切り裂いている刀身から結界を発動させて上半身を吹き飛ばすと、残っている下半身に札を仕込み、横へと跳んで小柄の男の攻撃を避ける。まずは一人ですか。

「っ!？」

避けられたことに驚いている男の顔を見ながら、飄々と立っている長身の男へと切りつけるが避けられ、そのまま殴り飛ばされ

る。やっぱり、あなたが一番の問題ですね。

飛ばされていく体を結界を使って強引に止めると、追撃してきた小柄の男の攻撃を時間を止めて男の攻撃を避ける。そのまま後ろから無防備となった背中に短刀を突き刺すと、小柄な男の体はすぐに凍り始めた。これで、残りは一人。

凍りついた小柄な男を砕くと同時に、嫌な予感がしたので時間を止め、いつの間にか後ろに居た長身の男の攻撃を回り込むようにして避ける。けれどもボクは、気がつくとそのまま後ろの木へと殴り飛ばされた。…予想はしてましたが、やっぱり一度見られたら対応されますか。

「このガキ！ぶつ殺して…」

木へと叩きつけられた後、ごほつごほつと生理的な咳を出しつつもゆっくりと立ち上がると、そのまま札に仕込んでおいた術を発動させて再生の終わったふくよかな男を灰へと変え、ちらりと空を見てから残った長身の男を睨みつけます。あと、少し。

「人間、何ゆえ我らの行く手を阻む？」

「エウナさんは…殺させません！」

吸血鬼の問いに来夢はそう答えると、再び突っ込んでいった。

現状出せる全ての手札を見られた今。彼女にはもう、目の前に対する化け物を殺す手は無いというのに。

「エウナさん」

それでは、逝ってきますね。

「来夢？」

どこかで来夢の声がした気がするが、周りを見てもいつもの少女の姿はない。私の隣にあるのは空のベット、床には彼女が昨日まで着ていた白いワンピースが無造作に脱ぎ捨てられており、壁を見てもそこには何も掛かっていない。どうやら彼女は先に起きたらしい。今のは気のせい？でも、確かに声がしたような…

「お目覚めですか？」

「メリー…」

確かに聞こえた声について思いを馳せていると、扉から銀色の髪をサイドに括った、浴衣姿の少女が入ってきた。

「ねえメリー、来夢は何処に居るの？」

私は何とも言えない不安に駆られて親友へとそう問う。

「来夢さんは…ご飯が出来ましたから食堂で話しますよ」

「食事？それなら来夢も一緒にいいんじゃないの？」

「先に食べてていいとのことなので」

メリーはそう言う私を促した。先に食べていいって…私たちは取る必要がないはずなのだけれど…。

そんな疑問を抱きながらも私はメリーに促されるままに食堂へと足を運ぶ。

「さあさあエウナさん、いっぱい食べてくださいね」

食堂の席へと着くとメリーが大量の肉料理を運んできた。この子、私を食べるつもりじゃないわよね？

「食べるわけ無いじゃないですかー。ほら、お肉は熱い間が一番美味しいですよ」

ん？今のやり取りにいつもの彼女らしくない違和感を少し感じる。

「ねえメリー、来夢は何処に行ったの？」

「来夢さんは月が綺麗だからお散歩に行くって言っていましたよー」

今度はちゃんと答えてくれる。へえ…月が綺麗だから散歩に、ね。

「知ってる？最近、私を殺そうって話が拳がつてるらしいわよ」

「…へえー、そうなんですかー」

「ええ、私のことを疎ましく思う連中が居るらしくてね。本当に困った連中だわ」

「ええ、本当にそうですね。エウナさんを殺せるわけ無いのに」

「そうでもないわよ。何でも話に聞くには連中、吸血鬼も殺せるような剣を手に入れたらしいわ。それに最強とか呼ばれてる奴も来るらしいし…もし来たら私なんて抵抗も無く殺されるでしょうね」

「そんな縁起でもないこといわないでくださいよー」

世間話のようにメリーへと語りかけて見るが、さきほどの様な違和感を出さずに彼女はいつもどおりに対応する。

「ところでメリー」

「何ですか？エウナさん」

「来夢は、何時から月を見ることが出来るようになったのかしら？」

「…どういうことですか？」

「確かあの子、鳥目で暗いと周りがほとんど見えないのよね？なにあなたは、アノ子は月が綺麗だから散歩に行ったと言った。それはどうしてだと思う？」

「…目が急に見えるようになったからじゃないですか？」

「私たちの知ってるあの子は、目が見えるようになったからと言って何も言わずに散歩に行くような子だったかしら？いつかの日の出の様に皆で行くとか騒ぎ出しそうなものだと思うのだけれど？」

そこまで一気に語ると席を立つと食堂の扉へと手をかける。

「少し出かけるわよ」

「ダメです。まだ食事中ですよ？」

「帰ってから皆で取るわ」

そこまで言ってから食堂の扉を開けると、その中もまた、食堂だった。

「メリー、早く空間を戻しなさい」

「嫌です、行かせません」

「…どうしてそこまでして私を行かせたくないの？」

「…」

「そつ、なら力付くでも通らせてもらっわ」

黙りこんだ彼女のことを肯定と取り、扉に向かって拳を握り締める。おそらく使われてるのは空間魔法でしょう。なら、ぶち壊せるわね。

「ダメです！」

メリーはそう叫ぶと構えている私に向かって槍を構えた。

「どうしても行くというなら…ここで動けなくします!」

…そこまで行かせたくないのね。

「やりなさい」

「え?」

「そうまでして行かせたくないなら私を貫けばいいでしょう。もしもあなたがそうまでして私を行かせたくないのなら、私はここでおとなしくしてるわ」

でも、そうしないなら、私はなんとしても行くわよ。そう言っていると握っている拳を解くと、静かに立つ。

カランカラン

後ろでメリーの持っている槍の落ちる音がする。そう、それがあなたの答えね。

「ありがとう、メリー」

私は再び拳を作ると扉を吹き飛ばし、食堂から出ると屋敷の外へと歩き出した。

「ごめん…なさい…」

後ろから誰かにあやまっているメリーの泣き声を聞きながら。

「さて、あの子は何処に居るのかしらね」

屋敷の外へと出ると一人ぼやく。勢いよく出たはいいけれど場所がわからないのじゃどうしようもないわね…

周りを見ても目印となるようなものは何も無く、さらに庭には濃厚な血の匂いが漂っており鼻も使えない。せつかく出れても…コレじゃ何の意味も無いわね。ただ気持ちだけが焦っていく。

と、屋敷の上の方、以前日の出を見に行った場所へと空から光の柱が降り注いでいるのを見つけた。

「あそこね」

エウナはそう呟くと飛び上がり、光の落ちる場所へと向かい始めた。

「メリーさん」

「ごめん…なさい…」

エウナが立ち去った後の食堂では、一人となったメリーがたたずんで泣いていた。

「あなたの…最期の…お願いだったのに…私…叶えてあげられなかった…」

そう呟くとメリーは誰も居なくなった食堂で静かに一人、泣き続けていた。

「ごめんね…ごめんね…来夢さん…」

その呟きは誰にも届くことはなく闇へと消えていく。

く来夢ちゃんく

屋敷の上の方の広場では、未だに来夢と長身の男との戦いが続いていた。

長身の男の出す攻撃を時間を止めて避けると、後ろに回りこんで切り付ける。けれども、あと少しというところで避けられ、カウンターを貰い吹き飛ばされる。

なんてことはない、いくら時間を止めれるとしても、止めてる間に攻撃をすること出来ないのである。つまり時間が流れて攻撃する時間がコンマであろうが何であろうが、その対応できるだけの性能があるなら、時間を止めれる事など何のメリットもなさない。

すでに体の感覚は能力の使いすぎでなく、短刀をちゃんと手に持っているのかどうかも怪しい。さらには体も少しづつ動かなくなってきたきました。

それでも、通用しないとわかっていながらも短刀を振るっては殴り飛ばされる。氷華ちゃんなら…もつと上手く戦うかも知れないですね。

回っていく視界の中、ふとそんな考えが浮かんだが、すぐにその思考を振り払う。いつも守ってくれた彼女のことを消したのは間違いないくボクなのだから…。

でも…それも…コレでおしまいです。

そう心の中で呟くと立ち上がり、短刀を杖へと持ち変えると一文字に構える。体は…まだ動きますね。

「…ロツク」

「む!?!」

そう唱えると長身の男の手足にキューブ上の結界が現れ、男の動きを止めた。

「失われし我が名の下に命ずる、彼のモノに永久の苦しみと一瞬の安らぎを与えよ」

そこまで唱え終わると、ボクは構えていた杖を振り下ろす。男の方は何とかして拘束から逃げ出そうとしてもがくが、もう…遅いです。

杖を振り下ろし終わると、空から巨大な光の柱が降り注ぎ、長身の吸血鬼の姿を塵へと変えた。

「あと…一仕事…」

そう呟くと、吸血鬼の近くにあった剣に手をかけると一気に凍結させると砕く。これで…安心。

もう限界…ですね。その光景を最期まで見終わると、ボクの体は意思に反してゆっくりと倒れていった。

「来夢！」

倒れ行く視界の中、エウナさんが叫びながらこちらに向かってくるのが見える。メリーさんだったら…仕方ないですね…もうちょっとだけ…がんばらないと…

くエウナさんく

「来夢！」

光の柱の降り注ぐ場所へと行くと、来夢がゆっくりと倒れているのが見えたので駆け寄り倒れていく体を抱きとめる。

「エウナ…さん？」

「しっかりしなさい！」

来夢の体は氷の様に冷たく、このままではあまり長くはないことがわかってしまった。

「エウナさん…聞いて…」

「少し黙ってなさい！」

コートを脱がすと体は血だらけで、ああもう！こんなことが分かってたら色々と道具を準備してたわよ！とりあえず冷えている体を温めようと思い、彼女の氷のような体を抱きしめる。

「エウナさん…あのね…ボクが死んでも…笑っていられるように…」
「縁起でもないこと言わないで！」

抱きしめていると彼女の体からはどんどん体温が無くなっていくのがわかり、その様子がもう何をやっても無駄だと言っている様で腹立だしく、そして何より、悲しかった。

「笑っていられるように…記憶を…凍結しますね」

「あなた…何言ってるの…？」

「ボクが…死んだら…ボクの事で…誰も…悲しむことがない様に…」

「バカいわないで！何そんな勝手なことを！」

「えへへ…ごめんなさい…」

目の前の少女の言っていることが信じられなかった。記憶の凍結？つまり…彼女のことを忘れるって言うこと？

「嘘…でしょう？」

「エウナ…さん？」

「嘘だって…言いなさいよ！」

「エウナさん…泣いてるの？」

「嘘なんでしょう！」

「泣かないで…くださいよ」

涙が勝手に溢れてくる。何よそれ…そんな結末なら…

「会わない方がよかっただなんて…言わないでくださいよ…」

来夢は幸せそうに私の顔を見ている。何で…何でそんな幸せそうなのよ！

「ボクは…エウナさんやメリーさんに会えて…幸せでしたよ」

「幸せなら…なんで…こんなこと…」

「ごめんなさい、そう言っただけで彼女はゆっくりと笑った。もう…そんな顔で笑われたら…どうしようもないじゃない…」

「月が…綺麗ですね…」

「ええ…ホントに…ね」

「エウナさん…」

「何…よ」

「夜桜…見に…いけなくて…ごめんなさい…」

「バカなこと言わないで…コレから見るんでしょう…」

「そう…ですね…」

そう言つと来夢は静かに目を閉じると

「エウナさん…ギュって…して…くれますか？」

私は冷たい彼女の体を強く抱きしめると泣いた。

「あつた…かい…」

そして、彼女はゆっくりと動かなくなった。

□ □ □ □

ふと気がつくと私は日の出を見た広場で座り込んでいた。よくはわからないが顔が濡れている。私、泣いていたの？

…？私の胸元を見るとそこには幸せそうな顔で眠るように死んでいる赤い服の少女の姿。

この子…誰…？

目の前に居る少女のことについて考えようとすると鈍い痛みが頭を襲った。

とりあえず少女をこのままにするのもなんなので屋敷へと戻ってスコップを持ってくると、一番大きな桜の下に少女の亡骸を埋めた。何だかわからないが、そうしないといけない気がしたのだ。

「桜の下には死体が眠る…か」

まさか私がその話を実践することになるうとはね。

彼女の亡骸を完全に埋めると、なんとなく月を仰ぐ。

「今日は、月が綺麗ね」

その彼女の眩きに応えるものは、何も居なかった。

ゝ最終回ゝ（後書き）

生き物の死んでない場所なんてないですよね

トユルーエンドとなりました

テンプレ大切！話の流れの読みやすいSSですとも、ええ

次は後日談が少々

もうちつとだけ続くんじゃないや・・・

後日談 あなたは笑えますか？（前書き）

最終話の後日談です

誤字チェックしてもらってる友人にあなたの書くものには甘さが足りないといわれたので

後日談 あなたは笑えますか？

幸せだったあの頃、思い出せないのはなぜ？

まだ完全に意識が覚めず夢つつつの中、ゆさゆさと体が揺られている。五月蠅い…思わず揺さぶる手を払い、寝返りを打つ。

「エウナさんー、起きてくださいよー、ご飯できましたよー」

今度は声付きで揺さぶってきた。ああもう、五月蠅いわね！

「わわっ！ちよっちよっ！？あふう…」

あまりにも五月蠅いので、揺すってくる手を掴むと体ごと布団の中へと引きずり込む。おお、柔らかくて冷たい。

そのまま引きずり込んだ彼女を抱き枕代わりに抱きしめると、また夢の中へと旅立つ。彼女は最初抵抗するようにじたばたしていたけれど抱きしめた辺りからおとなしくなった様な…腕でもぶつけたのかしらね。どうでもいいけれど、眠いし。

「ちよ、ちよっ！私を抱きしめたままねーるーなー！」

二度寝は至福ね。

「もうー！何であのまま寝るんですか！おかげでご飯冷めちゃったじゃないですか！」

「それは悪かったわよ」

「しかも…だ、抱きついたらまで！」

「あー、あなたって意外と抱き心地いいのね。今日から抱き枕にならない？」

「な…な…。はあ、ご飯温め直してきますから座っててください」

そう言うとメリーは調理場のほうへと行った。別に食べなくても死なないし、味なんて関係ないのだから、冷たかろうが不味かろうがどうでもいいと思うのだけれど。せつかく作るからには美味しく食べるって考えなのかしらね。

…でも、何故私たちは食べなくてもいいのに食事を取ってるんだろ？

何か、理由があつたような…

「ご飯出来ましたよー。んん？何か考え事ですか？」

「ん…ええ、ちよつとね」

そんなことを考えていると、メリーが食事を持ってきた。今日はきゅうりの漬物に魚の塩焼き、味噌汁にご飯といった完全に和食の内容。ん？和食…？私の生まれは西洋だし、この子も髪の色的に東の方じゃないのは確か。なのに…何で和食？

「そういえば、私たち何で食事してるのかしらね？」

「んんー？それは…食べないといけない人が居るからじゃないんですか」

「私もあなたも食べなくても平気のはずよね？」

「そういわれれば、そうですね…」

そこまで言うとメリーは、ムムムとしゃもじを片手に悩んでいる。まあ、思い出せないのだしそんな大したことじゃないわね。

「まあ、理由なんてないでしょう。さ、早く食事にしましょう？せつかく美味しい食事がまた冷めるわ」

「それもそうですかー、って冷めた原因はエウナさんじゃないですか！」

そしてお互いに頂きます、と言うと食事が始まった。うん、美味しいわね。

□ □ □ □ □

食事も終わり、手持ちご無沙汰になった私は屋敷の中や外をふらふらと散歩していた。意外と近くに掘り出し物とかも見つかるかもしれないじゃない。灯台下暗しというやつである。意味あったかしら。

メリーも誘ったのだけれど、使い終わった食器を洗うとかで調理場に戻ってしまった。何でも放っておくとかぴかぴかになって後で大変だとか何とか…今度、私も家事とか教えてもらおうかしらね。

「ん？これは？」

屋敷の裏、変な箱の隣を見るとお酒が放置してあるのを見つける。ふむ、鬼殺し…か。結構すごい名前のお酒ね。

実際に鬼が殺せるのかどうかは置いておくとしても、興味がわいたのは事実。それに例え鬼を殺せるとしてもお酒はお酒、飲み物である。こんな誰も来ないようなところで放置されるよりも誰かに飲まれる方が殺す側も本望でしょう。

「ちょっとグラス借りるわよ」

「あいさー」

思わぬ収穫も手にはいったので早速食堂へと行き、グラスを確保するとテラスへと向かう。メリーも後から勝手に来るでしょうし先に味見といきましょう。

とくとく、と酒瓶からグラスへと酒を注ぐ。ふむ、色は他のそれと変わらないわね。匂いも…これも対して違いはなし。少し度が強いくらいかしら？

そこまで観察をすませるとゆっくりとグラスを呷る。あら、意外ね。何であんな場所で放置されていたのが不思議になるほどに美味しいわ、このお酒。

ゆっくりゆっくりとグラスを呷っていくと、だんだん頭がぼーっとなつていく感覚が心地いい。また、夜風がほてった体に当たるとこれもまた心地いい。

「これは…いいもの見つけたわね…」

「あー！」

突然後ろから悲鳴のような声が上がったので、ゆっくりと振り返る。メリーったら驚いた顔しながらこちらを指差して…どうしたのかしら？

「それ私のー！」

「ああ…あなたのだったのね…悪いわね…」

「もー！楽しみにしてたのに…しょうがないので私も飲ませてもらいますからね！」

メリーは私の隣まで行くとグラスにお酒を注ぎ始めた。

どうやらこのお酒は放置されていたわけじゃなく…この子が置いたと。ふむ…となると私が飲むのも悪いし返してあげないといけないわね…。

「メリー…ちょっと…こっち…向いて…」

「はい、なんですかー?」

そこまでうつらうつらと考え、メリーの方を呼ぶとグラスを煽って口の中にお酒を溜めると、そのままキスをする。

「っん、んぐ!?!」

そのままゆっくりと…こぼれないようにしながら口移しでお酒を流し込んでいく。メリーは目を白黒とさせながらもこくり、こくりと喉をならせて飲み込んでいく。うん…少しこぼれたけれどちゃんと返せたわね…。

「ちよっ…え、エウナさん? い、一体何をしたのでしょうか?」

ふむ…? 何でそんなことを聞いて来るのかしら…? 顔も赤い様だし…幽霊も風邪とか引くのね

「何って…お酒…返したのだけんど…」

「返したって…」

一応問われたので答えてみると…メリーはうつむいてそのまま固まった。ふむ…? 何か変なことでもしたかしら…?

その体勢のままてぶつて何かを言っていたメリーは…ハッと何かを思い出したかのようにお酒のラベルを見ると顔を上げる…。

「あのエウナさん? もしかしたら酔っていらっやいますか?」

「馬鹿…言わないで…吸血鬼が…この程度で…酔っ…はず…ないじゃない…」

なぜか呂律が回りづらい舌でそう答える。まったく…まだ飲み始めたばかりだから酔うはずがないのに…変なこと聞くのね…。

私がそう答えるのを聞くと、メリーは急に私の前へと手を出し

「これ、何本に見えますか？」

この子…まだ疑ってるのね。いいわ…私が酔ってない事を証明してあげましょう…。

「8本ね…」

あら…初めて気づいたけれどこの子…指が多いのね…幽霊だからしら…？それにしても暑い…夜風が心地よいけどそろそろ限界…いつそ脱いでもおうか…。そういえば…この子冷たかったわね

「酔ってる…絶対酔ってますよこの人…って、うひゃあ!？」

なにやらぶつぶつと呟いてるメリーに後ろから近づくと…そのまま抱きつく…。ああ…柔らかいし冷たくて気持ちいいわ…。

「え、エウナさん？何していらっしやるので？」

「あなた…柔らかくて…冷たくて…気持ちいい…」

メリーを抱きしめると眠く…なってきた…。ちょうどいいので…肩のところに顎を乗せるとそのまま目を閉じる…。

「ちょ、ちょっとエウナさん！また寝るんですか！せめて寝るならベットに…」

目を閉じた辺りで…メリーが何かを言っていた気がするのだけれど…睡魔には…勝て…ない…のよ…。

「あなたは…居なくならないでね…」

何か無意識に言ったような気がしたが、そのまま私の意識は闇へと落ちた。

エウナが完全に眠ってしまった後、ひとり残されたメリーはゆっくりと酒を飲んでいた。

しばらく月を眺めながら飲んでいたが…ふと、自分の肩の上で少し苦しそうに眠るエウナへと視線を向けると

「私は…ずっと傍に居ますよ…エウナさん」

果たしてその呟きが届いたのかどうかは定かではないが、そうメリーが呟いたあとの彼女の寝顔はいくらか安らかであった。

ちなみにその次の日、二日酔いでダウンしているエウナをメリーが楽しそうに看病していたとか何とか。

後日談 あなたは笑えてますか？（後書き）

何で最後シリーズにするの？とのこと

（ ・ ・ ・ ） ぷっぷくぷー

一応これで完結ですがあと1作 最終回のハッピーエンド版で〜です

少しでも楽しんでいただけたら幸いです

ハッピーエンド 楽しめましょう？（前書き）

ハッピーエンドで終わらせる

というありがたいお言葉を誤字チェックしてもらってる人とは別の
人に言われたので書くことに

最終話の後のIFストーリーです

最終話とは違った点

エウナさんにメリーさんが同行

←

メリーさんのおかげで来夢ちゃんが生き延びる

ハッピーエンド 楽しみましょう？

「それではエウナさん、メリーさん今までお世話になりました♪」

「せっかく治ったのに… 本当に行くんですか？」

「一応ボクは旅人ですから♪」

そう言つて来夢はバックを片手に持つと微笑んだ。旅人つて… どんな理由よ…

あの後、人里の病院から退院するや否やこの子は、私たちとの暮らしに答えを出したいから旅に出たいとかいい始め、今日へと至るそのときに何度も泣き出すメリーを何度か慰めたのだけれど… あの時は大変だったわね。

私がそんな苦労を思い出している間にも、二人は話しを続けていた。

「忘れ物はない？」

「大丈夫なはず！」

「ちゃんと連絡するんですよ？」

「忘れてなければ！」

「ケガや病気に気をつけるんですよ？」

「たぶん平気！」

「ちゃんとしたものの食べるんですよ？」

「食べれないものは食べないので平気です！」

「… 連絡の方法は忘れてないですよね？」

「心に念ずる！」

ホントに大丈夫なのこの子…。

「ほらメリー、そんなに心配しなくても平気よ」

とはいえ何時までも心配していると何時までたっても出発しなさそうなので助け舟を出す。

「うむうむ、大船に乗ったつもりで居てください!」

…乗るのはあなただけなのだけれどね。まあそれにしても

「たまには帰ってくるのよ?」

「はいな、では行ってきますね」

そう応えると来夢は人里とは別の方へとふらふら歩き出した。ホントに分かつてるのかしらあの子。

「ホントに平気ですかねー」

「平気でしょ、ここに来る前もちゃんと旅をしていたのだし」

その様子を心配そうに眺めるメリーのことを安心させるようにそう応える。

「それもそうなんですけど…食べるものがないからって虫とか食べないでしょうかー…」

「…大丈夫よ」

大丈夫よね?信じてるわよ?

「それにしても、ここも寂しくなっちゃいますねー…ひゃう!?!」

「あら?私だけじゃ不満?」

何時までも去っていった方向を見つめるメリーのことを抱き寄せる。

「べ、別にそういうわけじゃ…んっっ」

「それはよかったわ。それじゃあの子の旅立ちと無事を願って酒盛りとしましょうか」

私は近くにある赤い顔に一つキスをすると屋敷のほうへと歩き出す。ああそういえば…

「はう…あ！エウナさんー！待ってくださいいよー！」
「メリー」

後ろから走ってくるメリーを待ってから問いかける。

「はい？何ですか？」

「今日は月が綺麗ね？」

「…はい、そうですね」

その後二人は、仲睦まじく屋敷の中へと入っていった。

「たまには帰ってこい…ですか」

来夢は月明かりのない暗い夜道をゆっくりと歩きながらそう呟く。

「お姉さん、氷華ちゃん、ボクは帰れる場所を見つけましたよ」

来夢は星空を見上げながらそう言つと。

「さてさて、ドコに行きましょうかね…」

その少女の様子をたくさん星が優しく見つめていた。

□ □ □ □

ゴーンゴーン

協会の上にあるベルが私たちを祝福するかのように鳴り響く。
今日は結婚式当日、私たちにとっては大切な日である。

「吸血鬼と幽霊が教会で結婚する事になるとはね…世の中分らないわ」

「ホントですねー…エウナさん私のドレスずれてません？大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、メリー」

あの子が居なくなつた後、色々あつて私とメリーは結婚することになった。もちろんそんなに楽な道ではなかったけれど…まあ世の中なんとかなるモノよ。お偉いさんも脅迫状1つでオーケーしてくれたみたいだし。

「結局…来夢さんは音沙汰無しですね…」

「しょうがないわよ…あの子、連絡の方法まるで知らなかったし」

結局あの後、来夢は一度も帰ってくることはなかった。噂では人里には何度か来てるらしく目撃談もいくつか私たちのところへと入ってきた。近くまで来たのなら帰りなさいよ…

「ほら、そろそろ時間だから行きなさい。遅れるわよ」

「へ？わわ！早く行かなっ…おおう？」

「っ…大丈夫？」

「はい…大丈夫です」

急ぎすぎて転びかけたメリーのことを抱きとめる。ウェディングドレスってホントに動きにくいよね…タキシードにしてよかったわ…

「それじゃ、また中で」

「はい、また中で会いましょう」

そう言つとメリーは式場へと入っていった。父役が居なかったの
で後ろには酒場のおじさんが付いている。…そういえばあの人も来
夢が旅に出ると聞いたら号泣してたわね。

その後もメリーが誓いの言葉を囁むなどといったアクシデントは
あったものの、無事指輪の交換まで進んだ。

「それでは、指輪の交換を…！？」

私が聖職者から指輪を受け取ろうとした瞬間、何か赤いものが目
の前を横切ったかと思うと、聖職者の手にあつたはずの指輪は突然
消えた。今の赤い姿は…確か…？

反射的に赤い姿を追って扉のほうへと目を向ける。

「にゃーっはっはっはっは！結婚式なんてさせてたまりますか！」

あの子ったら…

「来夢さん…?」

隣でもメリーが目を丸くしている。

「もしも指輪を返して欲しくばボクを捕まえることですね!」

そう言うとき赤いコートをまとったバカは教会のドアを開け、走り去った。そしてスグに人里全体に結界が張られていくのを感じる。それがあなたの答えなのね…いいわ、乗ってあげようじゃない。そうなるよこの服じゃ不味いわね…

「ほらメリー、着替えるわよ」

「え…?へ…?」

まだ驚きから回復していないメリーを抱き抱えると控え室へと走り出す。

「こちらがお着替えです」

控え室では数人の女性が私たちの着替えを持って待機していた。へえ、仕込みは万端ってことね?

いつもの服に着替えて控え室から式場へと戻ると、すでに観客は居なくなっており、空の席だけが残っていた。

「これは…一体…?」

メリーがその様子を呆然とした様子で見ている。ふむ、コレが仕込まれていたとしたら…これは一体どういう意味なのかしら…?

「メリー様、こちらでございます」

私が来夢の意図を考えると、黒いボディースーツにヘルメット姿の男がメリーに通信機を渡した。この光景…何かで聞いたような

「さあメリー様、すでに目標はαチームが追っています、ご指示を」

そこまで言われたところでメリーには合点が言ったのだろう、通信機を受け取りながら。

「他のチームはどのくらい？」

「現在、βチームとγチームはそれぞれ指示を待っています」

そこまで聞くとメリーはにこりと笑い通信機に向かって話し始めた。そう…確かメリーが見たと言ってた夢の…

「全軍、よく聞け。敵は一人だが吸血鬼から逃げ切ったこともありその能力は計り知れない！幼い見た目に惑わされるな。αチームはそのまま目標を追尾、位置だけ把握して捕まえようとはするな。βチームとγチームは私と合流して作戦を立てます。いいですね、全員一人で行動しようとはするな。皆で協力して目標を捕まえます。

範囲は…」

「人里全体よ」

私の方へと向いたメリーにそう応える。

「聞こえましたね！範囲は人里全体！それと決して一般人に迷惑は掛けないこと！この鬼ごっこ…私たちが勝ちます！」

メリーが通信機にそう叫ぶと通信機から各チームの了承の返事が返ってくる。へえ…結構様になってるじゃない。

「まずは合流？作戦を伝えるなら通信機越しでもいいと思うのだけれど…」

「それが…通信機は傍受されてそうですから会って話さないと」

「確かに…あの子ならそれくらいはしそうね」

ドコまで仕込んでいるのやら…。そう私が呆れているとメリーは少し不安そうに私の顔を見て。

「ところで…こんなことに付き合ってくれるんですか？」

「もちろんよお姫様。連絡の一つもよこさない悪い子には体に教え込まないといけないわね」

それに…

「夜桜、まだあの子と一緒に見に行っていないじゃない」

「…それもそうですね」

そう言って二人で笑い会つと手をつなぎ、外へと出る。

「行くわよメリー、あのバカを捕まえて夜桜を見に」

「行きましようかー、捕まえておかないと居なくなっちゃう大切な子を捕まえに」

そして、あの子との時間を精一杯楽しむために

「「今度はあの時とは条件が違う、逃げられると思わないことね（ですね）」」

ハッピーエンド 楽しみましょう？（後書き）

これにて完結となりました

完結までほぼ1ヶ月、いかがだったでしょうか？

ちなみに元々は短編でしたが予想外に続くことになったので連載になりました

続編らしきものが来週に出るってよ！わーい？
出ました

タイトルは『さよはじ はじさよ』です、シリアスで少し重め
がメインの本作とは別にギャグメインで軽めです
興味が出たらお付き合いください

それでは、最後までお付き合いいただいた読者様と誤字チェックと
ネタ合わせに付き合ってくれた友人、投稿間隔のことやハッピーエ
ンドで終わらせるといふ無茶振りをしてくれた友人に最高の感謝を
楽しんでいただけたら幸いです、ありがとうございました

あ、これIFストーリーです

最後の最後で誤字ったきゃっほーいヽヽ（>ω<）ノシ

以下誤字チェックしてくれてるありがたい友人はこの方

<http://mypage.syosetu.com/106908/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9035p/>

クラゲって可愛いですね！

2011年7月25日14時32分発行